最強メイドな彼女の最強伝説

塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最強メイドな彼女の最強伝説

【Ｎコード】
Ｎ９７８７Ｍ

【作者名】
塩

【あらすじ】
場所はリベリー皇国。王都リベリー中央に建つリベリー城。
見目麗しく身分教養礼儀がなければなることのできない皇子の側仕えの地位に平凡な容姿をしたルリは就いていた。事実を知ったものは首を傾げもっと良いメイドがいるだろうと薦めるが、当の皇子ルドは「ルリが良い」と首を縦に振らない。彼女のなにがいいんだろうか？
これは彼女が起こす、後に最強伝説と語り継がれる物語である。

※「残酷な描写あり」は念のためにです。今のところ作品にそのような描写はありません※

最強メイドな彼女の伝説始動

お天気も良く外でお茶会なんてするには絶好の日和な今日この頃。
私の主であり、命の恩人であり、はたまたリベリー国第五皇子でもあるルド様の元に客が来ていた。
喉まで出かかる溜め息をなんとか飲み込んで、注いだ紅茶を主と客人の前に置く。

「にしても地味だな」

客人が顎に手を当ててじろじろと見てくる。そして言った。
もちろん私の顔を見て、だ。

その綺麗な面ぶん殴ってやろうか。美形だからって何言っても許されると思うなよ。
何様だお前。……皇子様か。

現実のシビアさにちょっと絶望した。
いいもんね。私には愛しのルド様が居るもんね。

何を隠そう主を尋ねて来た客人とはまさにリベリー国第一皇子のセシル。
私の主であるルド様とは腹違いの兄弟だ。
自分に近しい皇子を次の皇にして、あわよくば自分が高い位に着こうと目論む政争はあるが、争っているのは私欲にまみれた馬鹿な貴族ばかりで、当の皇子達五人の仲は普通に良かったりする。

だからといってもアポも何も無しで私室に来るなんて事は予想外の出来事で、

いつもなら皇子達の訪問予定がある日はルド様が、
訪れる皇子達と私が遭遇しないように、お付きの役を一時外してくれるのだ。
が、今日は間に合わなかった。まあ当然だ。流石に電撃訪問されては交代する余地もない。つーかあるわけない。
電撃訪問されたときはそりゃもう普通にまったりゆったり窓辺で二人で日に当たりながらお茶を飲んでいたくらいだし。

「どうせ側仕えにするならもっと見目麗しいものを付ければ良いものの」

なんでわざわざこんな地味なのを…っといって私の顔を見て溜息をつく第一皇子。

人の顔見て溜め息とかどんだけ失礼なんだ。
むしろお前の顔以外の要素の方がよっぽど溜め息ものだよと言ってやりたい。主に性格とか。

「兄様、そんなこといわないでよ。彼女は誰よりも優秀なんだよ」

ああ好きです愛してますルド様！そんなこと言ってくれる貴方に私は一生ついていきます。
にこりと笑って兄に反論するルド様に感極まって破顔しそうになるのを表情筋を駆使してなんとか抑えた。
優秀なメイドは主人達の話を聞いても聞かぬ振り、何も反応をしないものなのだ。

私はルド様のために完璧なメイドを徹してみせます！
心の中で意気込んだ。

「なんだ？夜伽の具合でも良いのか？」
んなな！？なんて事を！賢すぎて時々忘れそうになるけれどまだ十歳のルド様に下ネタを振るなんて、
情操教育にわるいでしょ！っていうか「夜伽」なんてルド様が分かるわけ……
「兄様いやだなあ。ボクまだ性交の経験はないよ」
ル、ルド様あああぁあ！？
十歳児の口から出て来たせ、せいこうっなんて言葉に私は思わず唖然とする。
夜伽よりある意味生々しい。持っていたポットを落としそうになった。

「なんだ違うのか」
「うん。でもハジメテの相手はルリがいいかなあ」

つまらなそうに言った第一皇子にルド様はさらりと爆弾発言。
なんでそこで私の名前をぉお！？
私は今度こそ本当にポットを落としそうになった。
というか一瞬手からすり抜けて気付かれないうちに掴み直した。
これが本当に十歳児のいう言葉だろうか。ルド様…恐ろしい子…！
若干顔が赤くなるのが否めないが、なんとか顔はポーカーフェイスを保った。
「…こんな地味の何が良いのやら」
第一皇子がぼそりと言った。おい、聞こえてるし。思いっきり。

悪かったな、どうせ鼻低いし彫り浅いしその他諸々だよー！
つーかアジア系の人に西洋系な美を求めちゃいけないよ！まちがってる！と私は主張する！

「いいよ別に分かんなくても」

むしろ分かってルリの魅力に気付かれちゃったら嫌だからね。
なんてさらりというルド様に第一皇子は心底分からないな。と言った顔をした。

＊＊＊

ふと思い立って一番下の弟の私室に行けば、中で弟とその側仕えのメイドが同席して茶を飲んでいた。思わず目を見開く。
一応上位のものが座る方向に弟が腰掛けてはいるが、そもそも一介のメイドが第五と言えど皇子と同席するなんて信じられない光景だ。
メイドの礼儀がなっていないのか、弟が馬鹿にされているのか、しかしどちらにしてもそんなメイドをあのセバスチャンが弟の側仕えにするわけがない。
セバスチャン容認なんだろうか？
それに弟もメイドが己のことを馬鹿にしていることを気づかないようなやつじゃない。
弟は兄弟の中でも一番権力には無頓着だが、王族として軽視されるのを容認することはない。

というか今までも何度か弟の私室には訪れているが、この側仕えは見たことがない。
いつもなら兼教育係のセバスチャンがついているのになぜだ？

呆然とその光景を見つめていると、背を向けて座っていたはずのメイドが気づき、こちらを振り向いた。
そしてつられるように弟の視線がメイドから俺に移る。

「あれ、兄様！どうかしたの？」

弟は立ち上がり、入り口に突っ立ったままの俺の所まで来て部屋に招いてくれる。
メイドは深々と頭を下げてから素早く机に広げてあるカップを片付け部屋を出ていった。

その後すぐに新しい茶を持ってやって来たメイドは、俺と弟の会話に一切関わらず、
メイドの鏡とも言える態度で給仕をする。

…よく分からないヤツだ。
皇族と同席するなど礼儀のなっていないことをするかと思えば給仕は完璧にこなす。
しかも煎れた茶が俺の側仕えのよりも旨いってどういうことだ。つーかマジ旨いんだけど。
しかもこのお茶請け見たことねぇ。……ってうま！
なんだ？これ。焼いたパンみたいだが、さくっとしてるのにどこかしっとりしてて
しかも蜂蜜付けにしたようなしつこい甘さではなく、ほんのり紅茶を引き立てるような甘さをしている…

ルドのヤツ、こんなのどこから仕入れてくるんだ？セバスチャンが探してきたのか？
いや、でもセバスチャンならこちらにも回してくれるはずだし…

なんとなく釈然としない感覚に、ここぞとばかりにメイドを貶してみた、
…が無反応だ。まったくの無表情だ。
ここまで綺麗に無視されると、本来これが正しいのだと知っていてもいらついてくる。
なのにルドのハジメテの相手はルリが、の発言にいとも簡単にメイドは頬を染めた。

そのことが何となく気に入らなかった。
俺の会話には全く反応しなかったのにルドの発言にそうあからさまに反応されると逆に表情を引き出したくなる。

ふん、まあ暫くの暇つぶしにもなるだろうし…

出されたお茶請けをもうひとつまみ口に放りこもながら、ルドとの会話もそこそこに
側仕えのメイドの行動を観察した。

最強メイドな彼女との出会い

「おやルリ、またお菓子作りですか？」
「セバスチャンさん！」

後ろから声をかけられ、ボールを両手に抱えながら振り返る。
セバスチャンさんはカップの乗ったトレーを片手に持って立っていた。
ルド様の部屋からの帰りなんだろう。

今日も他の皇子がルド様の部屋を訪れた為、側仕えの任をセバスチャンさんに代わってもらっていたのだ。
セバスチャンさんが帰ってきたということは皇子はもう帰ったのだろう。

「あ、洗い物ならお菓子を作り終わったらするので、流しに置いていてください」
「ああ助かるよ」

セバスチャンさんはルド様付きの執事兼教育係だ。
セバスチャンと聞けば紳士的な老人を思い出すだろうけど、このセバスチャンさんはまだ四十になったばかりだ。しかも美形。
さらに見た目はどう見ても三十代前半にしか見えない。

なんで私の周りの人はすべからく美形ばかりなんだろう！…少し切なくなった。

セバスチャンさんはルド様が生まれた時からずっとルド様の給仕の責任者をしているから、この地位に着いたのはそれこそ三十歳の頃

になる。
責任者とはすなわち皇子の教育係という立場にも付くため、余程すごい人しか付くことが出来ないポジションだ。
他の皇子の教育係はみんなかなり高齢だから、それに三十歳でなったセバスチャンさんはかなり有能な人なんだろう。

今私はセバスチャンさんの養子ということになっている。
この世界に全く地位も何もない私が、皇子の側仕えになれるはずがないからというルド様の提案からだ。
実際私がセバスチャンさんの養子という立場でなかったら、ルド様の側仕えどころか、城仕えにすらなれなかっただろう。

セバスチャンさんにはルド様に拾われてから三週間かけてメイドは何たるか。様々な知識を詰め込まれた。
そのお陰で今では立派なメイドとしてルド様の側仕えをこなせている。

「それにしてもやはりルリの作るお菓子は興味深いね。小麦を甘くするなんて考えもつかなかったよ」
「私の国では当たり前でしたからねー」

この国はケーキやクッキーなどといった麦を使ったお菓子がない。
小麦を使うのはパンやパスタなどの主食類ばかりだ。
というかこの世界にはお菓子という分類がそもそもなくて、そういう甘味はフルーツや木の実のみ。よくても木の実のハチミツ付け位だ。

そんなわけで私の作るお菓子はもの凄くルド様に喜んで頂けているから、私としては嬉しいかぎりなんだけど。

「おや」
「ん？」

会話をしていたセバスチャンさんの視線がふと少し逸れた。
どうしたんだろうかと首を傾げればセバスチャンさんの綺麗な手が頬に伸びてきた。

「え、え？」

そしてあろう事か…唇辺りを親指の腹ですすっと撫でてきた…だと！？
うえええぇぇ、ちょ、ま。

「粉がついてたよ。きっと袋を開けた時に飛んでついたんじゃないかな」

そう言って唇辺りから離れていったセバスチャンさんの親指の腹を見れば白い粉が付いていた。
つ、付いてたのを取ってくれたんだろうけど…！

「あ、ありがとうございまふ…」

そうだ落ち着け私！というかこの人私の養父だから！おとうさんだからね！落ち着け！
トキメクとか…！私どんだけ…！

赤くなりながらお礼を言った私にセバスチャンさんは微笑んだ。

「ルド様にお菓子を作って差し上げるのももちろん良いけれど、たまには私のためにも作ってほしいね」

「は、ははははいっ」

これはいじめなんだろうか。無駄に顔が良いんだからそういう発言は本当控えてほしい。

本人は自分の子供に言っている感覚なのかもしれないけれど、あなたの顔はどう考えてもお父さんとしてみるには若すぎるんだから…！

私の実の父親もう五十代だから…！あなたと違って年齢に見た目が伴ってたんだからね！

顔を赤くする私を微笑ましそうに微笑んで見下ろすセバスチャンさんに私は居心地が悪いのを紛らわすように必死にボールの中身の生地をこねまくった。

＊＊＊

全く、本当に可愛らしい娘だよ。

頬を染めて、それを必死に紛らわそうとするルリに思わず笑みが広がっていく。

その私の笑みがさらにルリの羞恥心を誘うらしく、ルリの顔はさらに赤くなる。

私は何となく頬が赤く染まるルリを見つめた。

そしてなんとなくルリの頬に手を添える。

「あああ、あのなんでしょう！」

突然の私の行動にあたふたするルリに構わずその頬を撫でる。
そして少し前のことを思い出した。
…随分血色も良くなったものだ。会った当初は…もう死んでしまうんじゃないかと思うほど真っ青だったのに。
そういえば、彼女がこちらに来てまだ一ヶ月と少しか。
彼女が馴染み過ぎているのか、もう何年も一緒に仕事をしていたような感覚がする。
仕事の飲み込みが早くて、今では他のメイド達の誰よりも優れたメイドとなっている。
その腕前はもう私とも並んでいるだろう。
見たこともない美味な『お菓子』を作れるところや、豊富な異なる文化の童話や政治の話など…他の要素も合わせれば既に私をも越えているかもしれない。
ルリとの出会いを思い出すのは、やはりかなり昔のことを思い出しているような感覚だった。
馬車で遠出した際、兇人の強襲を受けてルド様と我々付き人は離ればなれになってしまった。
依頼人は敵国だろうか、ただの金目当ての蛮人だろうか、それとも他の皇子を擁立するするあの愚かな貴族達の仕業だろうか。
そんな事を頭の隅で考える自分に嫌気がさす。
今は何より皇子の心配をしなくてはならないのに。

他の従者や護衛の兵達に指示をとばし、ルド様を探すためにちりぢりになった付き人達を見送った。
本当ならば私も探しにいきたいが、ルド様がここに戻ってきた時私が居なければ次の的確な指示が出せない。
兇人を撃退する力どころか、撒くことも私には出来ないから、この場で待っているのは適切と言えるのだけれど…

探しにいきたい…。

もどかしい感覚に吐きそうになる溜め息を飲み込んで、また指示を出した。

がさり、
暫くして、森の茂みから擦れる音がした。
馬車に残っていた兵士が警戒して槍を構えて、私も慌ててそちらを見る。

がさり、
出てきたのはぼろぼろの服を纏った異国風の少女。
……そしてその少女は誰かを背負っていた。

ルド皇子だ！
この場の誰もがそのことを理解して、兵達は少女に槍を向ける。
だが私はすぐにそれを下ろさせた。

この少女は兇人ではないだろう。
捕えたルド様をわざわざ私たちのところに連れてくる意味がない。
もしかしたら罠ということも考えられるが…

少女の肩から覗くようにしてルド様と目が合った。
ルド様の意識はある。それでいて抵抗もなにもしていないということはこの娘は兇人では…少なくとも我々に害のある存在ではないということだ。
ルド様は優しい御方だ。我々が何かしら害を被る状況を何もせずにじっとしているなんてありえない。

…そもそもこんな少女が兇人だとは、私には到底思えなかった。

「セバスチャン…」

ルド様の声が私を呼んだ。
私は兵達をそこに控えさせ、一人ルド様を背負っている少女に近寄った。
兵達に僅かな緊張が走るが、私はさして緊張はしなかった。
どこか直感的な思いは、既にこの子は大丈夫だろうという確信に変わっていたからだ。

近づいた私に全体を見ていた少女の視線が定まり、目と目が合う。

「ええと、貴方がこの子…じゃなくて、この方のお付きの人ですか？」

はじめて聞いた少女の声はどこか弱々しかった。
そうですと頷いて答えれば、少女はほっとした表情をしてからぐらりとこちらに向かって倒れてきた。
力つきて倒れてもルド様は落とさぬようにしっかりと抱きとめている少女に感銘を受ける。

私は崩れ落ちた体を慌てて抱きとめた。少女の服装は所々土が付いていたが、それによって己の服装が汚れることを厭だとは感じなかった。

「セバスチャン…」
「はい、ご無事で何よりでございます。皇子」
「この人はボクを助けてくれました。手厚く看護を…」
「ええ分かりました。ですから皇子もご安心してお休みください」

濃い疲労を見せながらも言葉を紡ぐルド様にしっかりと頷いて、倒れてもなおルド様を抱えて離さない少女の腕から眠りに付いたルド様を引き受けて片手で抱き上げ、少女も片手で支えた。

それが彼女ールリとの出会いだった。

最強メイドの目立ちたくない理由

なんで目立ちたくないって？
一番の理由と言えばあの幼稚な旧メイド達の嫌がらせだ。
一週間森を彷徨ったためそれに比べればこんな虐め屁でもないとは思っていた。
けど服を汚されたり必要なものを隠されたり、仕事に支障をきたすのはいただけない。
極めつけにはルド様のお飲みになる紅茶の中に異物を入れるだなんて！
私が気づいたからいいものの、気づかなかったらルド様のお口に入っていただなんて今でも思い出すだけで怒りが込み上げてくる。
虐めの原因は急に現れた平凡な容姿をした私が皇子の側仕えになったことだろう。
周りの人はみんな西洋系の顔立ちで、彫りも深いし鼻も高い。
私は正反対の東洋系の顔立ちだから、それを隠す為にできるだけ西洋人に見えるようなメイクをしている。
いくらセバスチャンさんの養子だからといって、異国の人間を城仕えにするのはいろいろ無理があるだろうと三人で判断した結果だった。
だが無理矢理西洋系に見えるようなメイクをして、なんとか周りと同じように見えるように誤摩化したため、
そのメイクの所為で、元の東洋系の顔は可愛い！って胸張って言えるほどではなかったものの、

そこそこ見えるくらいの十人中六人くらいがお世辞なしに「まあまあかわいいんじゃね？」と言ってくれる所謂中の上（または上の下？）な顔だったのが、悲しくなるほどに平凡な取り柄のない顔になってしまった。

東洋系でそこそこ見れる顔を選ぶか、城仕えかを選ぶならばもちろん城仕えを選ぶ。

だけどこの平凡な顔で側仕えをしていては、いらぬ嫉妬を多く受けてしまう。
故にあの出来事から私はなるべく、人の目につかないようにして仕事をこなしているのだ。

私の精神衛生上のため、なにより滞りなくルド様の側仕えの任を全うする為に。

私は目立つのだ。平凡ななりをしていて側仕えとしてのスキルと知識はセバスチャンさんと同等くらいだとは自負している。
それに加え地球で培った、こちらでは希少な知識が沢山ある。
ルド様とセバスチャンさん以外がいる時は極力それが出ないように気を使っているが、ふとした時に出ないとも限らない。

しかも私が仕えているのは皇子であるルド様。王族との接触が極端に多い。
そんな彼らに万が一私の希有さが露見して気に入られでもしたら、またあの面倒な事態が起こりかねない。

ルド様仕えのメイド達はもう掌握ゴホン！攻略ゲホン！…仲直り済みだから何も起こらないだろうけれど、
他にも面倒なことに四人も皇子は居て、皇帝も居て、その分だけ皇

族仕えのメイドも居る。
ルド様仕えのメイド達はセバスチャンさんが掌握しているため、比較的楽に収拾できたけれど、
皇子同士は仲は良くてもその周りの側仕えは政敵で、うっかり掌握なんて簡単に出来ないし、解雇して解決なんてもっと出来ない。

いったん嫌がらせのたぐいが起きたら収拾するのにかなりの期間がかかってしまうだろう。
そんなくだらないことでルド様の仕えの仕事を滞らせたくないし、お手を煩わせるなんてもっての他だ。

だから私は出来るだけ陰に潜む。

…ルド様は、私を自慢したいとおっしゃってくださって、私が目立ちたがらないのを常々残念にお思いだけれど。
それでもこればかりは譲れなかった。

だって私の生き甲斐はルド様のお役に少しでも立つことなんだから。

＊＊＊

私はこの城でもう六年も仕えている。もともとお母さんが昔城で仕えていたこともあって、
十三の頃には見習いとして城で働き始めていた。

初めは城の廊下の掃除やカーテンやテーブルクロスなどの洗濯…誰でも出来るような雑用をして、
十八になった去年、ようやく皇子のメイドとして働けるようになっ

た。
仕えることになったのは一番下の皇子で、政治的に見れば一番地位の低い皇子だ。
だけど、そもそも皇族に仕えることが出来ること自体が身に余るような幸福で、
城内に居る兵か官の誰かと結婚してメイドをやめるまで、ずっと今のままの地位の仕事でいいと思っていた。

そんな中だ。彼女が現れたのは。

皇子仕えで私の上司であるセバスチャン様がメイドとして養子を連れてきたのは。
セバスチャン様自体がとてもお美しい方なので、血は繋がっていない養子であってもきっと美しい方がいらっしゃるんだろうと思っていたが、

実際に来たのは私よりも、数段も見劣りする平凡な子だった。
それなのに着て早々、その子はセバスチャン様と変わって皇子の側仕えになってしまった。
もともとその地位にセバスチャン様が就いていたこともあって、手の届かない役だと思っていた所に何の取り柄もなさそうな地味で見劣りする子が就いたことに、私も、他の皇子仕えのメイド達も嫉妬した。

そこからそのメイドを虐めることになるのはもう必然で、私達は彼女のメイド服を色水で汚したり、私物を隠したり、話しかけられても無視したりとした。

他のメイド達は嫉妬で周りが見えなくなってたのか、虐めればセバスチャン様の耳に入って、最悪解雇されるかもしてないという危険

も分からなくなっていたけれど、私は周りより比較的冷静だったため万が一を考えて物証の残らない嫌がらせしかしなかった。

あるときかなり過激だった数人のメイドが彼女が皇子に持っていこうとしていた紅茶の入ったポットの中に泥水を入れた。
それで皇子に解雇されてしまえばいいなどと思って彼女達はしたのだろう。
でもその目論みは彼女がポットの中の紅茶の異変に気づいて破られた。

蒸している最中のポットの上蓋を取って、彼女は立ちこめる湯気に顔を近づけてにおいを嗅ぐ仕草をした。
そしてふっと眉間にしわを寄せた。
それから皇子用ではないカップを持ってきて少量注ぎ、口に含んで眉間に寄ったしわが濃くなった。

ぎらり、
彼女が厨房にいるメイド達を鋭い目で見回した。
私は思わずどきりとして背中に冷や汗をかいた。まるで軍の隊長が発するような威圧感を感じた。

周りのメイド達も、泥水を入れた本人達もごくりと生唾を飲み込んで、怖々と彼女を見た。

ふいに、彼女が持っていた泥水入りのカップが手からすり抜けて落とされる。
一拍置いて、床にぶつかり砕け散ったカップの音が厨房に響いた。

「なっ…なにしてるのよ！」
一人が彼女の行動に対して怒鳴った。泥水を入れたこの中の一人だ。

彼女は怒鳴ったこのほうを向いて鋭かった目をさらに鋭くした。
怒鳴った子はひっと小さい悲鳴を上げて黙りこくる。

「わかってる？」

彼女言った。その声はひどく低かった。

「わかってるの？これはルド様のお口に入るかもしれないものなのにーーこんな幼稚なことをするなんて」

そういえば彼女がこうして怒るなんて初めてじゃないだろうか？
服を汚されてもものを隠されても、怒るどころかぴくりとも表情を変えなかったのに
今の彼女は誰から見ても分かるくらいに、激怒していた。

「それでもあなた達は皇子仕えのメイドか！私に対してする悪戯はまだしも、
皇子に迷惑のかかるかもしれないことをするなんてーーそんなことも気づけないようならば皇子仕えなんてやめてしまえ！！」

彼女の怒鳴り声が厨房に響いた。
怒鳴られた本人は青かった顔を真っ赤にして口をぱくぱくと開閉する。
彼女の怒気よりも皇子仕えをやめろと言われた屈辱が勝ったのだろう。

「あ、あなたにそんなこと言われる筋合いなんてないわ！何様なのよ！」
「そ、そうよ！」
「あなたなんてどうせセバスチャン様に無理を言って側仕えにして

もらっただけのくせに！」

今までこそこそと聞こえる内緒話程度にしていた彼女の悪口がどんどん出てくる。

泥水を入れた子達や、そうじゃない人たちも口々に彼女の悪口を大声で言う。

みんな冷静さを失ってしまったのだろう。

怒鳴っている彼女達は見た目は綺麗だけど今はとても醜く見える。

対して涼しげに彼女達の罵倒を聞き流す彼女は格好よく見えた。

そもそもこんな場面、セバスチャン様に見つかりでもしたら、どうなるか。

ふと厨房の入り口に目を向ければ、セバスチャン様が壁に背を預けてこの様子を見ていた。

「…！」

気づかなかった。いつの間に居たんだろうか？

怒鳴っている彼女達は周りが見えていないのか未だ気づかない。

彼女はセバスチャン様の養子だ。こんなひどい罵倒を浴びせれば、彼女達はなんの言い訳の余地もなく解雇にされてしまうだろう。

自分が冷静でいて本当によかった。

危うくくだらない理由でこの職を辞さなくてはいけない所だった。

罵倒を涼しい顔で聞いていた彼女がふと動いた。

動いた方向に居たメイド達はびくりと肩を揺らして怖がるが、虚勢を張ってなによ！と怒鳴る。

そんなメイド達を無視して彼女はメイド達を通り過ぎて、かまどの

前に立った。
見ればそこには鍋が乗っていて、中の水は沸騰していた。
いつのまに、お湯を沸かしていたのだろうか？私は思わず驚愕する。
彼女はかまどから鍋をおろしてポットに熱湯を入れる。
「セバスチャンさん」
彼女が声を上げた。私はまたも驚く。
誰も気づいてないと思っていたのに、彼女はセバスチャン様がいると知っていたとは思わなかった。
当然気づいていなかった他のメイド達は驚いて当たりを見渡し、入り口に寄りかかっていたセバスチャン様を見て青ざめる。
「セ、セバスチャン様！」
「あの、これはっ、その！」
慌てて弁解をしようとするが、
もうかなり前から見られていたのだから今更何を言っても遅いだろう。
慌てる周りを気にせずに、セバスチャン様は彼女に話しかける。
「ルリ、ルド様が待ちくたびれていらしたよ」
「そうですか、申し訳ないことをしまいしたね。急いで向かいます」
「うん、そうするといいよ」
笑顔で彼女と会話をするセバスチャン様に、彼女のほうも笑顔で答えた。

そして、彼女は早々に厨房を去っていった。

「ーーーさて、」

彼女が完全に見えなくなって、セバスチャン様は寄りかかっていた壁から背を離して声を発した。
セバスチャン様の目は、今まで見たことのないような冷たい色をしていた。

その目に私も含め厨房に居たメイド達はみんな、ひっと小さな悲鳴を漏らした。

その後彼女の服を汚したり、当然泥水を入れたメイド達はセバスチャン様に解雇を言い渡されていた。
ふつう城仕えへの降格はあっても完全な解雇は滅多にない。
きっと彼女達はこれから実家でかなり肩身の狭い思いをすることになるだろう。
かくいう私は一応物理的に何かしたわけではないので厳重注意で済んだけれど。

…セバスチャン様の説教はものすごく怖かった。

「だからあなたはホントセバスチャン様と親子ですよね」

のちに仲良くなったルリは、見た目云々関係なく、ものすごく付き合いやすい人で、

とても優秀なメイドであることを私は知った。
セバスチャン様と同じくらい博識で、礼儀作法は無駄がなくて完璧で、
煎れる紅茶は同じ茶葉で煎れたとは思えないくらい美味しくて、
今思えば紅茶に泥が入っているのを、ポットの中に入った紅茶の匂いだけで気づいたのだから
紅茶に関してかなり長けているのだろう。
この前セバスチャン様が新しい茶葉に変えたときもすぐに前と違っていることを気づいていたし、
私はまったく違いが分からなかった。

「ーーそう？私あんなに美形じゃないけど」
「ああ、そこじゃなくてですね」

あの人を一瞬で萎縮させる目とか、そういうことを言ってるんですよ。
そう言った私に彼女ーールリは目をぱちりと瞬いて、それから苦笑を漏らした。

「まあ、直伝ではあるけどね」

直伝だからといって、そのまま同じような目が出来ること自体がすごいのだと思うんだけど…
そう思ったが何も言わずに私はほほえんでおいた。

お気づきの方も居るとは思うが、私は所謂異世界召喚、
または異世界トリップというものによってこの世界に来た。
元の世界は当然地球で日本だ。

気付いた時には深い森の中に居て、一週間ほどそこを彷徨った。
お腹が減ってのども乾いて、空腹感ももはや感じなくなって疲労だけしか感じられなくなって、
もう死を覚悟して歩くのもやめた時に

たまたま、
従者や護衛達と離れてしまい、兇人に追われているルド様と遭遇した。

絶望の淵に居た私には、いきなり茂みの中から飛び出してきた可愛らしい容姿のルド様がまるで天使のように見えたのだ。
そしてその後すぐに追ってきた兇人達。恐怖に震えたのはほんの一瞬で、
どうせ一度諦めた命ならこの子を助けるために投げ出そうと思い、
兇人達に丸腰で突っ込んでいった。

運がよかったのか、召喚された補正効果かなにかで上がっていた身体能力のお陰で、
ルド様を追っていた兇人全員を伸して、そのままルド様を探していたセバスチャンさんや従者達と合流した。
そして一週間飲まず食わずで倒れてしまった私をルド様は拾ってくれて手厚く介抱してくれたのだ。

それどころか帰る所のない私をこうして雇ってくれていて、
私は今も生きていられる。
死んでしまう絶望の淵を彷徨った私にとって今のこの環境は感謝しても仕切れないほど有り難いものだった。
毎日お風呂に入れるし、食事も三食きっちりと食べられる。
着られる服も、柔らかいベッドもある。
そんな環境を与えてくれたルド様に、私は一生心から仕えていきたいと思う。

セバスチャンさんの教えだと、メイドは主に命の危機が迫った時、その身を犠牲にしてでも主を守り通すものだそうだ。
まあ、主を一番に思うならそれは当然のことだろう。
だけど、守り通して自分が死んだ後は誰が主を守るんだろう。
その疑問を口にした時セバスチャンさんは困ったように笑った。
命の危機ーーきっとあの時のように兇人に狙われたときのことなんだろう。
ルド様が逃げ出せる時間を稼ぐ為の足止めをしても目の前に居るのが狙ってきた兇人の全てとは限らない。
足止めの時間が足りなくて皇子が守ってくれる他の人の所に辿り着く前に兇人が皇子に追いついてしまうかもしれない。
そんな憂いを残しながら足止めとして死んでしまうくらいなら…

最初っから自分の手で守りきればいいのに。

幸い補正効果かなにかで身体能力は上がっていて、訓練すればするほど戦闘能力は上がっていく。
そんな自分に怖くもなるが、それ以上にルド様を守ることが出来るというううれしさが上回っていた。

メイドの一日は忙しい。
私は特にルド様の側仕えだからルド様が起床される数時間前からいろいろな準備をする。
それからルド様が就寝されるまでずっと働き詰めだから、
鍛錬できるのは必然的に仕事が始まる早朝しかない。

日が明けていない、朝食の準備をするコックが起き始める頃に私の鍛錬は始まる。
人気のない庭で走り込みして、セバスチャンさんに用意してもらった剣と重さを同じにした木刀を使って素振りをする。
向こうでは軽い武道オタク（観賞するのみだけど）だった知識を生かして、見よう見まねで型の練習をする。

「…ふう」

一息つき、木刀を下ろして持ってきたタオルで汗を拭くと、視線を感じた。
振り返ると、そこには一人の人が

って、ちょ、あの人軍本部隊の副隊長じゃなかったっけ！？
つーかそうだよ、間違いないよ。ご本人なんだけど！
なんでいるんだこんな夜更けに！

「お前…」

「…なんでしょう」

話しかけられたー！

何を言われるんだろうか？今やっていた型はこの世界にはもちろんないものなので少し焦る。
それでも日頃培っているザ・無表情を駆使して平然と聞き返す。

「部隊のものじゃないな？お前はなんだ？」

「…メイドでございます」

何を聞かれるかと思ったら職務質問か。
まあ確かにこんな時間帯にこんな人気のない所で木刀振り回している人が居たら怪しく思うか。

正直に答えたら案の定、軍本部隊副隊長は目を見開いて驚いた。

「メイドが、武術の鍛錬を？」

なぜ？とその見開かれた目がありありと語っていた。
メイドはすべからくおしとやかな者ばかりで、そもそも武術を修得する意味も理由もない。

この男ーー確か名前はディシオだっけーーが驚くのも、まあ無理もないだろう。

「最近特に主の周りは物騒ですから。命をもって守るより、武をもって守るほうが確実でしょう？」

持論を言えば、男の目はさらに大きく見開かれ、
そして急に割れんばかりの大声で笑い出した。

っちょ、まだみんな就寝中なんだから！うるさいよその声！ルド様が起きたらどうしてくれる！

「はははははっはは、ははは！はは　だっげほげほ！ははは！」

笑いすぎて咳き込んでいる副隊長にもう白い目を向ける。
こいつ意味が分からん。
私の貴重な鍛錬時間を奪ってるんだから早くこの場から去ってくれはしないだろうか。

「…はははははっは！げほっはははは！そんなメイド初めて見たぜ！
そうだな、いっそ戦えれば手っ取り早いってもんだもんな…ははははっは！」
「……うぜ」
「！！だっはっはっっはははっはっはははｈ！！」

ぼそりとつぶやいたつもりだった暴言はどうやら目の前の男に聞こえていたらしい。
それがどういうわけかさらにウケたらしく、上限を知らない男の大きな笑い声はどんどん大きくなってく。

いい加減うるさいんだけど。ルド様が健やかな眠りから覚めちゃったらどうすんだ！

つーわけで黙れ！

どがあ！

「！！」

黙らせる目的で下ろしていた木刀を副隊長の真横に振り下ろせば、
ようやく笑い声が止まった。
副隊長の顔が青ざめてるけど気にしない。
別に木刀が地面に十センチほど食い込んでるとか気にしない。

「黙ろうね」

「はい」

必死で首を振った副隊長に私はにっこりと笑って木刀を退けた。

「へえ、すごいなルド皇子の側仕えなんか。まあ確かに最近皇子の
周りは常に物騒だからな」

うんうんと頷くディシオに私もまあねと返す。
恐怖政治で黙らせたつもりだったが、時間が経てばどうやらそれす
らも面白い要素だったらしく、
さらに懐かれてしまった。

…マゾヒスト？

できれば目立ちたくない。この前不幸にも第一皇子に遭遇してしま
ったからこれ以上は！と思っていたのに
しょっぱなから躓いてるとかどんだけだ。

取り敢えず私を見かけても話しかけないことと、
武術が出来ることを絶対公言しないことを脅しゴホン！…お願いしておいた。

「ずっと一人で鍛錬してんのか？」
「…私の話聞いてた？誰にも知られたくないんだから相手に誘えないでしょう
とういかそもそも私鍛錬出来るのこの時間帯だけだからどっちにしても無理だし」

実はそろそろイメトレだけでは限界を感じてはいた。
対人での経験はルド様と出会ったあの時だけ。正直、次に戦わなくちゃいけない状況になって上手くイメトレ通りに立ち回れるか心配だ。

「…オレが、鍛錬付き合おうか？」
「え？」

思わぬ申し出に目を輝かせて振り向いてしまう。
そんな私の態度の変わり具合に、ディシオは面食らった顔をする。
…うん、まあその気持ちも分かる。私もちょっと現金かなとは思った。

ディシオはがしがしと頭をかきつつ言う。

「…お前の戦い方に興味がある。正直今の部隊での鍛錬には限界を感じてて
俺は今以上に強くなりたい　そんでお前も相手が欲しい。お互い良いことだけだろ？」
「…私この時間帯にしか鍛錬出来ないけど？」

「ああ、オレがこの時間帯にいたのは夜勤明けでだからな。夜勤の後は昼まで自由時間だ。
それに大抵はその夜勤明けの午後を休暇日に当ててるから実質夜勤明けは一日中暇。こんな時間に鍛錬しても勤務には何の支障もきたさないってわけだ」

確かに、こんな早朝でしかも夜勤明けだからって遠慮しかけたけど、そのあとが休暇なら体力的に問題ないだろうし、

「つまり遊びに行く相手もデートに誘う相手もいないから暇つぶしに付き合ってくれと」
「どう解釈したらそうなるんだよ！あと友人くらいいるって！」
「うん、つまり恋人はいないのか。かわいそうに」
「…そりゃ、いねえけどよ…」

からかったらディシオはおもいっきり表情を暗くした。淀んだ火の玉が背景に何個も浮かぶ勢いだ。
うわ、もしかしてつい最近フラれたばっかっていうオチはないよね？流石に可哀想になってフォローをしようと…

「ってお前もメイドしてるってことは恋人いねーってことだろ！」

あ、復活した。

「私はルド様さえいれば後はなにもいらない！あ、あとセバスチャンさんもいて欲しいけど」
「無欲ですって言い方しといてかなり欲張りだろ！ルド様もその教育係も文句無しの美形！」
「ルド様が美形なのは当たり前じゃん。そして無欲なわけないじゃ

ないか！ルド様のお側にいられるだけでこの上ない幸せなんだからその他はいらないって意味よ！」

「……ああうん。わかった。とりあえず話し戻さねえか？」

言い合いはディシオが先に根を上げた。ふふん、私にルド様関連で勝てるとは思うな！

なんの勝ちなのか自分でもよく分かんないけど。

っていうかまだ語り足りない。周りにルド様のあれこれを語れるのはフィエさんくらいだし。

「今からルド様の素晴らしいところを語ってあげようとしたのに」

「いや、はい。ルド様の素晴らしさはもう十分理解し致しましたでございます…」

「…そう？」

「そうそう」

げっそりとした男を見て私は一つ頷いた。

というかこの男、話してると楽しいな。叩けば響くし。

うん、私の周りって（というかセバスチャンさん）翻弄するタイプばっかだったから新鮮かも。

…別にサディストに目覚めたわけではないよ？

だってこっちに来て敬語ばっかり使ってたから、こうやってタメでふざけて話すのが嬉しい。

そういえば地球では敬語なんて話せなかったなー…タメで変な日本語で友達とくだらないこと話して…

まあ、今の生活に不満なんて一ミクロンもないけどね！

「じゃあお相手、よろしくお願いしてもいいかな」

「ーーおう！良いぜ」

気前よく承ってくれたディシオに、私は手を差し出した。

そしてがしっと荒々しい握手を交わす。

ーーこうして私は鍛錬用のいい的を得たのであった。

まあ、訳すと友達、と読まないこともないかもしれない、けど。

最強メイドな彼女と主様

最近第一皇子の特攻が多くてあまりルド様と一緒にお茶ができない。
既に一回見つかっているから開き直っても良いけど、諦めて開き直るにはまだ私には隠し通せている要素が多すぎた。

ルド様とゆったりお茶ができるのはセバスチャンさん経由で知ることのできる、
第一皇子の執務代理の時間や武術鍛錬、軍指揮練習の時間など僅か時間をぬってだ。

そんなうっとうしい第一皇子をそろそろ呪い殺してしまおうかというほどルド様不足に落ち入りかけている私に、
ルド様は唐突にも甘い誘惑を言い放った。

「もう、暫くは兄様達に部屋に来ないでって言っておこうかな…」
「ルド様、なんでまたそんなことを…」

その申し出は，私もルド様と一緒に過ごす時間が増えるってことだから、嬉しい限りなんだけれど、
それを本当に行ってしまえば、他の皇子に近い貴族達が、ルド様が何か企んでるんじゃないかっていちゃもんつけてくるだろうし…
大事なことだから二度言うけれど、ルド様と過ごす時間が増えるのは、ほんっっと嬉しいんだけど。

「だって最近訪問者が多い所為で、ルリとの時間がどんどんなくなっているでしょ？僕はもっとルリと過ごす時間がほしい」

……！！！

ル、ルドさまあああ！ああもう、どんだけだ私の主！
どんだけ私のキュン！ポイント押さえてるんだろう！めっちゃキュン！とした！
というか私と同じこと考えてくれてたことがなにによりうれしい！以心伝心ってステキだ！

「…では、夜の時にこちらに参りたいんですが、よろしいでしょうか？」
「！本当？わかった。楽しみにしているよ」

ありがとう、ルリ。
そう言ってはにかんだルド様に，私も微笑み返した。

ルド様は賢くあられるため、周りはついつい忘れてしまっているけれど、
この方はまだ十歳なんだ。
セバスチャンさんは立場上、あまりルド様を甘やかせない。
ルド様の兄達は、そもそも鈍感だから、ルド様がほんの少し，無理していらっしゃることに全く気付かない。

だから私が、出来るだけ、年下の弟に接するように、甘やかしてあげたいと思う。

あのメイド大量解雇の一件後仲良くなった一人のメイドさん（フィエレンダさん略してフィエさん）に夜の雑務を代わってもらって、
私はろうそく片手にルド様の部屋に向かう。

見つかると良からぬ噂が立ってしまうかもしれないから、誰もいないことを確認してから、するりと開けたドアの隙間に入り込んだ。

「ーールリ」
「ルド様、こんばんわ」

ルド様は寝台の上に座っていて，ぼんやりと窓の外の月を見ていた。昼とは違う雰囲気に、いつか言われたハジメテは…云々を思い出す。けど、そんなのはすぐに頭の隅に追いやって、ルド様の側に寄った。

「ルリ、何か話をしてほしいんだ。ルリの世界の話ーー」
「かしこまりました。ーールド様、体が冷えますから、ベットに入られないのなら何か一枚羽織ってください」
「わかった」

のそりと反応するルド様に、私はブランケットを渡し、ルド様は肩に羽織った。

「では、そうですね…夜なので政治関連の話はなしにしましょう」

なにより政治の話は話す私の方も頭を使う。
専門的に学んだわけではないから政治の話といっても思い出しつつ、こっちに来てからセバスチャンさんに学んだ知識を踏まえてリベリー皇国に応用出来そうなものを選んで少々脚色して話している。
その作業がまた大変で大変で…
もちろんルド様のためだからそんな苦労どうってことないけどね！！
でもどっちにしても子守唄代わりに政治の話はどうかと思うのでここは童話をチョイスだ。

もちろん子供に優しいグロくない方の童話を。

「ーー私の世界の童話なんてどうですか？」

「うん、それが聞きたいな」

うなずいたルド様に私は途中で話を途切らせてしまわないように早急に話を頭の中に思い描き、

ゆっくりと物語を語り出した。内容は『シンデレラ』

……別にルド様と結婚願望があるわけじゃないからねっ！！

実際実は身分が全くない私とルド様が結婚出来る分けないし、いや、もちろんルド様に政略結婚なんてして欲しくはないんだけど。

ってあああ…そうだ、この国の現状的にルド様が政略結婚しないって無理じゃない？

いや、もちろんその相手と恋愛出来るって可能性もないわけじゃないけど…ううう。

ルド様には幸せになって欲しいから、ここはいっそ頑張って国のあり方から変えるとか…

無理かな…ううん、でも頑張ればなんとかならないこともないか…も？

ああ、もちろん脳内煩悩たっぷりの間もシンデレラの話はちゃんとしてる。

そこは抜かりない！

妄想はどうぞご自由に。けど仕事に支障きたすんじゃねえ！が私のモットーである。

「王子はシンデレラのことが忘れられずに、シンデレラの残していったガラスの靴を手に国中をーー」

とす、
軽い衝撃が肩から伝わって、私はそちらを向いた。
「あ」
話（というか煩悩？）に集中していて気付かなかった。どうやらルド様は眠気に勝てずに私の肩に寄りかかったってしまったようだ。ルド様はもう殆ど夢の世界に旅立っている。
っていうかル，ルド様が近い近い！うわあ睫毛長！髪の毛ふわふわ！やばいマジで天使！
急接近なルド様にドキマギしながらも口調は努めて冷静に。
私の内心絶叫をルド様に知られたらきっと引かれる。いや、そんなことで嫌うほどルド様は心狭くないけどね！
「ルド様、もうお休みになられては？お話の続きはまた明日にしましょう」
「でも、るり…」
もう既に普段ルド様がご就寝になられる時間を過ぎている。
本当に眠いのか、いつものはっきりした口調は面影がない。舌足らずに答える姿に頬が緩む。
「まだ、ねむくない」
「しかしルド様、あまりご無理をなされるとお体に響きます」
だだをこねるルド様かわいい。ほんとこんな実弟ほしかった。いや、ルド様いるだけで超満足だけど。
けどこの我が侭を許しちゃうと、困るのはルド様で。
夜の訪問は一応セバスチャンさんに許可は取ってるけど、朝はいつ

も通りの起床というのが条件だ。
セバスチャンさんはこういうのには厳しいから、万が一起きれなかった時の罰が怖い。
そしてルド様へのもそうだけど、私も側仕え解任されそうで恐い。
ルド様と一緒にいられないとかたぶん私死んでしまうんじゃないだろうか。

どうやって寝かしつけよう…なんて困っていると眠そうなルド様の目とぱちりと合った。
そして一瞬ルド様が震えたような気がした。

「るり、ごめんなさい…わがままをいって…」

声が弱いような気がした。きっと眠気だけではない。

「ぼくはもっとしっかりしなきゃいけないのに…」

私ははっとする。
そして静かにルド様を見つめる。

聡明な方だから私がルド様を弟のように甘やかそうとしているのを気付いていたのかもしれない。

ルド様はしっかりしていないと貴族達に利用されてしまう。
セバスチャンさんももちろんそうされないように尽力してくれるけれど、
公爵や金銭的に権力を持った大貴族にその場から払われてしまったらそこまでだ。
ルド様はそういう貴族達と一人で立ち向かわなくてはならない。

皇族として、国のために、兄達のために。
そんな状況にいつ立たされても可笑しくないから、ルド様はこうして甘えべたになってしまって、
だから私は甘えて欲しくて、こうして甘やかして。

「無理なさらないでくださいルド様…」

恐れ多くも、ルド様の柔らかい髪を撫でる。
気持ちよく感じてくれたのか、目を細めながらも戸惑った気配を感じた。

「もっと我が侭を言ってくださってもいいんです。もっと迷惑だってかけて頂いて大丈夫です
甘えることは、弱さではないのですよ」

正直私に語れるものは少ない。
いくら教養が豊かになったからといって人生観が豊かになるとは限らない。
それに私が経験出来たのはただの一般家庭で育った普通の女の子と、皇族の側仕えだ。
皇族としてのルド様の背負う重荷なんて到底理解もできない。

だけど、それを支えていく自信だけはあった。

「もっと寄りかかってください。頼ってください。
人は一人で生きていけるものではないのですから」

使い古された言葉だけど、それが本心だった。
…ルド様にちゃんと伝わればいい。

「るり…」
「はい」
「あした、どうわのはなしのつづきがききたい…」
「はい」
「あさっては、またちがうはなしを…」
「はい」
「そのつぎも、そのまたつぎも、はなしを」
「いつでも、いくらでもお話ししますよ。ずっと側におりますルド様」

側にいると言った私に、ルド様は短い、まるで縋るような問いかけを止め、
天使のような、柔らかい笑みを浮かべられた。

「おやすみ、るり…」
「はいお休みなさいませ」

少しの間もなく小さな寝息が聞こえてきて、私は小さく笑った。

「ずっと側に、命尽きるまで…いえ、例え命が尽きても、この身が滅びてもずっとお仕え致します」

それが一度死にかけた、助けて頂いた私の決意だ。

最強メイドな彼女の主様日記

今日も今日とて変わることないすばらしく可愛らしくまじ天使！
なルド様が一日どうお過ごしになっているかをみなさんに紹介しよ
うと思う。
可愛すぎなので、自分にはストーカーの気質があるかも…て方は回
れ右をして頂きたい。
ルド様の可愛らしさに囚われてストーカーになんてなったら、私が
直々に始末して差し上げるけど。
だから始末されたくないストーカー気質さんはとりあえず回れ右！
始末されたい！っていうしょっぱなから危ない人はもうこの世から
消えてくれ今すぐ。

ではルド様の一日のご開帳ー。

朝

というわけでとりあえず、ルド様を起こしにきました。
ルド様、熟睡中です！
ああもうなんて可愛らしいんだろう！白い肌、うっすらと色づいて
いる頬、柔らかそうな金色のふわっふわな髪、
なにより幸せそうにふにゃーんってなっている寝顔はまじ天使！！
はあああああ、かーわーゆーいー！

でもずっと見つめていてルド様が起床される時間が遅くなってはい
けない。

涙を飲んで、可愛らしい寝顔に別れを告げてルド様に声を掛ける。

「ルド様、朝ですよ」

その一声でルド様は大抵起きてしまわれる。
セバスチャンさん曰く、気配には敏感なのだそうで。
え？なんで私があそこまで寝顔堪能しても起きなかったって？
フフフ。そりゃあ私の全総力をもって気配を消してるからに決まってるじゃないか！
能力の無駄遣いと言うことなかれ！むしろこれこそ正しい能力の使い方だと私は主張する！
いいじゃん平和的で！なにより私が和む！

「ん…るり？」

うあああああ！反則です！その眠そうな感じの声！

「お、おはようございますルド様、今日もよい天気ですよ」

あまりの可愛らしさに声が一瞬きょどってしまった。でも平静を保つ。
別に第一皇子が来たときみたいに無表情でってことはもちろんしないけど、
ちょっとこのテンション高過ぎる内なる私はルド様には晒せない。
うん。

「おはよう、ルリ」

ルド様がベッドから起き上がります。もう目はちゃんと覚めたみたいで、口調はしっかりしている。

はあああありりしいルド様もすてきです。

ここで側仕えの特権その一！

お召し替えのお手伝いができるのだ！！！！

ああ、さすがにルド様の裸体をみてはあはあする変態ではありません。そこはちゃんと意識的に萌えポイントから外してありますから。

でも一瞬毎回のようにいつかのルド様のびっくり発言「ハジメテはルリがーー」が浮かんでしまう。

だめだルリ！意識をしっかりと保つんだ！己に負けるな！

「ルリ？」

「ーー今日のお召し物はこちらです。今日は暑くなりそうなので涼しげな青を基調としてみました」

「うんありがとう、確かに涼しそう。さすがルリだね」

「勿体なきお言葉でございます」

ルド様のお褒めのお言葉に意識が戻ってきた。うん私その調子だ。

そしてルド様のお着替えにも心乱すことなく滞りなく終えた。

朝食

ルド様は朝食を王族のご家族とともに摂られる。

なので私は当然着いていくことができずにお留守番。変わりにいつもセバスチャンさんが着いていってくれている。

ルド様の食事中の光景…悔しいけど仕方がない。

あそこには王族の人だけではなくそれぞれの側仕えもいるのだ。そんなところに私が出向いたらあの旧メイド達の二の舞になってしまう。

だから悔し紛れにルド様が朝食の間に勉強中のお茶請けと三時の二人でのお茶会用にお菓子を作る。

え？私の朝食？そんなの三分で終わらせたよー。
フィエさんが信じられないものをみるような目で見てたけど気にしない気にしない。

勉強時間

朝食が終わるとルド様はお昼までお勉強をなさる。
今日は学んだことの復習らしいのでセバスチャンさんはいなく、ルド様は一人ひたすら資料とにらめっこをしている。

あああ、頑張っているルド様すてきだ。かわゆす！
真剣な横顔が逆に庇護欲さそうっていうか…

資料がところ狭しと置かれている机の上には朝食の時に作ったクッキーが置いてある。
それにルド様が手を伸ばされてクッキーを一枚口に運ばれる。
その瞬間ルド様の顔が綻んだ。

うあああああ幸せだまじで幸せなんだけどこの瞬間！ああよかったお菓子作れて！
地球にいた頃の私グッジョブ！一時期はやってたお菓子作りブームグッジョブ！

ルド様に喜んでもらってふはんふはんしていると、ルド様が紅茶を飲み干してしまわれたようだ。
すかさず次を注ぐ。
ここでどれだけ気配を殺して紅茶をつぎ、ルド様にお礼を言わせずに勉強に捗ってもらえるかが評価ポイントだ。
うん、ルド様からのお礼がなかった。今日は満点だ！

「ルリ、今日の紅茶もお茶請けもすごくおいしかったよ。ありがとう」

その場でのお礼はなくても勉強が終わった後で必ずルド様はお礼を言ってくださる。

「喜んで頂けたのなら幸いです」

「また明日もお願いね。ぼくはルリの作ったものが大好きだから」

大好きだから。大好きだから。大好きだから大好きだから大好きだから

だ、大好きだって言われたーーーー！！！

お、おちつけ。そうだ私の作ったものにたいしてだから決して私のことをだ、大好きだと言ったわけではないぞ。

そうだ落ち着け。冷静になるのだルリ！

「また明日も頑張って作ります！」

落ち着けと言ったつもりだったが興奮冷めやらぬ状態で少し声が大きくなってしまった。

ルド様はそんな私に僅かに目を見開いて驚かれたが、すぐによろしくねと言って微笑んでくれた。

ああもうルド様まじ天使！大天使も及ばないくらいすっごい天使！

（混乱してる）

昼食

お昼は皇族の方々各自予定が合わないとかでいつもルド様はお部屋で一人召し上がる。

恐れ多くも「ルリが一緒の方がおいしい」なんてかっわいらしいことを仰ってくださったので、
セバスチャンさんに許可を取って一緒に食事。
とはいえ皇族の方と同じものを食べることはできないので主に紅茶を飲んですごす。
なんていうかむしろルド様のお食事姿がメインディッシュみたいな？
はっ、どんな高級料理だってルド様の笑顔には叶わないぜキラン！
みたいな。

「ルリも一緒に食べられたらいいのに…」
「私はもう（ルド様の笑顔で）お腹がいっぱいなので遠慮せずに」
うん、なんだか最近内なる私が隠せなくなってきた気がする。気をつけなくては。うん。

ルド様の食事が終わったら私は食器を片付けに厨房に向かう。
戻ったついでに一分で昼食を終わらす。
フィエさんのまるでこの世の終わりを見たような顔とか気にしない気にしない。
疎かにしてるように見えるけど、ちゃんとシェフの人に栄養価高くて速く食べれるものって注文してるから。
体調管理はちゃんとしてるから。いざという時に動けないと困るからね。

午後

午後は三日に一度くらいのペースで皇族としての教養を学ぶ。
ダンス練習だったりテーブルマナーだったり、パーティーでの腹の探り合いの練習だったり。

ちなみに一度ダンス練習では恐れ多いことながらお相手役を務めさせて頂いたことがある。
それはもう天にも昇るような気持ちで、勿体ない話だが、嬉しすぎて当のダンスを踊っている時の記憶がふっとんでしまっていた。
気付いたら厨房で皿洗いしてたとかどんだけだ…！
残っていたはずのルド様の手の温もりも冷たい水によって流されていたと結末に終わった。
…三日三晩枕を涙で濡らしたさ…

教養がない時はほかの皇子が会いにきたり、ルド様が会いにいったり。私とまったりティータイムだったり。
ああ最近はほんと第一皇子のせいでティータイムは潰れているけれど。

…今日も着やがりました第一皇子。
仕方ないので側仕えをセバスチャンさんに代わってもらい、私は一人厨房で大作作り。
え？ああケーキです。今日は三段に挑戦中です。
失敗したら第一皇子に投げつけてやろうと思います。
月のない夜の廊下では背後に気をつけてくれたまえ。

夕食

夕食は皇族にさらに数人貴族が参加することが多い。というか五日に二日のペースで貴族が自らの財力を見せびらかすかのように晩餐会を開いているからなんだけど。
当然ここでも私は参加出来ないのでセバスチャンさん頑張ってください！のターンです。
くやしい…！私の見目がもうちょっと良かったらルド様に群がるア

フォ貴族達を笑顔で蹴散らかすのに！

夜中

そうして来た夜中です！この時間が一番うっはあ！って感じです。
子供に優しい方の童話を話しつつルド様がご就寝なさるまで一緒にいる。

もお寝る間際のルド様の舌足らずな感じが何とも言えなくて！
もうパラダイス！って感じになる。

でもああこの前子守唄をご所望された時は焦った。
私、歌は駄目なんです。もう壊滅的なんです。
カラオケに行って気持ちよく一曲歌い終わるとみんなソファに沈んで眠ってました。
音楽の成績は2です。テストと授業態度で乗り切った2です。はい。

なんか半分以上のろけになったような気がしないでもない。
でもまあこのくらいじゃルド様の可愛らしさは語りきれない。
今度はいっそポエムでも書いてみるかなー…でも私文才ないしな。

とりあえずこの世界にカメラがないことが悔しくて仕方がないです。
携帯よ！召喚されてくれ！

××．××．××　天気：　晴れ　　ルリ

最強メイドな彼女と第一皇子様

今日もルド様に童話をお話しして、眠りに着いたルド様の寝顔を少しの間堪能してから静かに音を立てないように部屋を退出するーー、

「こんな時間になにをやってたんだ？」

「！！」

うわ！

おもわず声を出してしまいそうになったところで、私は慌てて自分の手で口を覆う。

ここで叫んだらルド様起きちゃうし！

対して目の前のその男は目をぱちくりとした。

その手の平は私に向けられていて、大方叫ぶ直前で私の口を押さえようとして現在行き場に困っているんだろう。

私は目の前の男ーーーリベリー皇国第一皇子、現在一番皇位に近いと言われているセシル皇子を見上げた。

「なんの　用でしょうか」

自分で覆った手を放し、自分の出しうる一番小さい声で、問いかける。

静かな城の廊下だから、この音量でも十分目の前の人物には声は届いたようだ。

「問うただろう？『こんな時間になにをやっていたんだ？』と」

ニヒルな笑みを浮かべて聞く第一皇子に私は顔を歪めたくなった。
あくまで無表情を貫き通すけど。
行き場に困っていた皇子の手は、既に私の逃走を阻むかのようにルド様の部屋のドアに置かれていて、両側を塞いでいた。

ああどうしようどうしよう。
セバスチャンさんにはメイドがルド様の部屋に夜出入りしているなんて噂は立ってはいけないから、
誰にも見られないようにねと念を押されていたのに。
…一応皇子同士の仲はいいからルド様に頼めば言いふらさないでくれるだろうか？
いや、それ以前にこんなことでルド様のお手を煩わせるだなんて自分が許せない。

芸術品のように整った皇子の顔が以前にも増して忌々しい。
ああもうホントあんたって顔以外の要素最悪だよね！

「なにも言わない、か」
黙り込んで解決策を考えていた私に、皇子は勝ち誇ったような表情をして言った。

「やはり夜の奉仕でもしてたのか？ルドもなにがいいのかお前のことを気に入っていたしな」

そんなことするわけないじゃんか！そもそもルド様と私って時点でおこがましいってのに
これで皇子がルド様に悪い虫を寄せない云々の理由で私を問いつめてるなら許せるけど、

絶対これは自分の娯楽のためにやってる。
このまじでにっくたらしい顔がそれを物語っている。

「案外俺もしてみれば分かるか？メイドには手を出さない主義だが、」

だったらそのまま手を出さないでくれ！というか自分で地味だと言っときながら！手を出すとか！
ってうあああああちょ、ま。そこでどうして顔を近づけるかな！
セバスチャンさんとかセバスチャンさんとかのせいである程度免疫着いたかなー…とか思ってたけど、
やっぱ無理！顔だけは、顔だけはいいからやっぱ恥ずかしい！
まあ、悔しいから無表情は貫き通すけど！

その無表情、無言の攻防が功をなしたのか、第一皇子は口をへの字に曲げて顔を遠ざけた。

「つまらんな。まるで人形のようだ」

あなただけにです。

「ルドの部屋にいくら訪れてももう側仕えの役はセバスチャンがやっているし、なんなんだ？お前が側仕えなんじゃないのか？」

いえ、私が側仕えですけど。それはあなたに会わないように代わってもらってるだけだから！
というか私に会うためにルド様のとこにここの所通い詰めてたの！？
まさか私自身が原因でルド様との幸せ！なお茶会が亡き者になってただなんて！

「お前もーー」
「ーーー！！」
突然襲った首筋にびりびりと走る嫌な予感。
「おい？」
いきなり無表情だった私の顔が引きつったことに気付いた皇子は、言いかけていた言葉を止め、不思議そうにこちらを見る。
だけど私はそれに対応しているどころじゃない。
…これはどちらを狙っているのか、見極めは重要だ。
ルド様の場合早急に皇子を追い返してから対応しなきゃいけないし、狙いが皇子ならこの場から一刻も早く逃げないといけない。
両方なら、私は迷わずルド様を選ぶけど…
残念なことに初めからこの皇子を見捨てる選択肢も選べない。
ルド様は上四人の兄たちを慕っていらっしゃるから、こんな皇子でも死んでしまえばルド様は悲しむ。
それに、目の前にいる人が明日には冷たくなってるなんて平和な日本で過ごしていた私には耐えることはできない。
だから……
いやな気配を放っている相手にばれないように、私は気配を探り、見極める。
どっちだ、どっちだ、どっちだ…なにが狙いだ。
「おい、メイドーー」
ーーーこっちか！

痺れを切らして私の顔を掴んで自分の方を向けようとした皇子の右手を逆に掴む。
そしておもいっきり開いた方の手で皇子の頬をひっぱたいた。

「いっ！？…はっ？」
ずどん！
頬に手を当ててこちらを皇子が睨み、すぐそこに突き刺さった刃物を見て絶句する。
刃物が刺さった位置は、私が平手をしていなかったら本来皇子の頭があった場所だ。

「！」
私も壁に突き刺さった刃物を見て驚いた振りをする。
狙いはどうやら第一皇子のよう。
そしてこれはなんとか実力を隠しながらもこの危機は乗り切れそうな気配。

「っちい！来い！」

流石に暗殺され慣れているのか、すぐにはっとして皇子は私の手を引きこの場から逃げるように走った。

にしてもどこに逃げるつもりなんだろう？
皇子は剣は使えると聞いたけど、もしや外に出て対応しようとでも思ってるのか。
確かにこの狭い廊下では刃の長い剣は兇人達が使う暗器よりも不利だ。
だけど外に出た場合、対一であれば有利だけど複数を相手にすることになると一気に不利になる。

相手は、複数だよ？

前を先導する皇子に心の中で問いかけた。

だが予想通り皇子は外に向かうような通路を選んで通っている。

このまま行けば、不利になること必須。もちろん私が手を出せば変わるけれど、

…この先に確か丁度いい場所があったな…

先導している皇子に一気に追いつき、小さく「着いてきてください」と呟く。

「は？」

皇子の返事は待たずに、さらに加速して後ろから追ってくる兇人との距離を開く。

廊下の角を曲がった所で兇人たちの視界から一回私達は消える。

曲がった先は沢山の部屋がある廊下。

私は曲がった所から五つ目にある部屋に皇子を投げ入れて自分も入った。

何部屋かは人が使ってるから、隠れたと向こうが分かってもどの部屋にかは特定しにくい。

それにドアの影で待ち伏せされる可能性もあるから、向こうもドアを開ける際は細心の注意が必要になる。

「おい、メイドこんな所に隠れてもーー」

「失礼します」

文句を言う皇子を無視して、皇子のマントを脱がしにかかる。

「は、おい！こんな所で盛ってどうする！」

「お静かにお願いします。兇人に気づかれます」

「！」

私の行動にどうやら一瞬追われていることが頭から抜けてたみたいだ。

言われて悔しそうに顔を歪めた。

というかその顔、私があんたを襲うことは決定事項か…！

こんなとこで襲うなんてするわけないじゃんか…！

というかこんな状況じゃなくても襲わんわ！

遠くでドアが開く音が何度かした。

やはり兇人たちは私たちがどこかの部屋に隠れていることを察したのだろう。

私たちの部屋までは十室。一室一室慎重になっているからといって、それほど時間もない。

ーー早くしなくては。

「襲おうとしてるのではありません。マントと、上の服をお貸しください。

それを着て私が兇人を引きつけます。皇子はそこの窓から外に抜けて兵舎に向かってください。

降りて右手に向かえばすぐ兵舎です」

最低限の声で皇子の耳元で伝える。自ら皇子に接近するなんてものすごく癪だけど、
背に腹は代えられない、ここは我慢しなくては。
だって少なくとも皇子を暗殺するために寄越された兇人だ。
小さな音も普通に拾いそうだし。

皇子は提案した私を驚いた顔で見つめた。

「ここは二階だぞ？俺に足の骨を折れというのか？」
「下には垣根があります。擦り傷は免れないでしょうがそこは死ぬよりましと割り切ってくださいませ」
「…俺が戦えることを忘れていないか？」
「あなたほどの重要人物を暗殺するのに兇人が少数だとは思えません。
もしかしたら運悪く殺められてしまうかもしれないし、刃物に猛毒が塗ってあったら掠っただけで致命的です」

もちろんそんな予想立てなくても気配で相手が複数だということは把握してるんだけど、
気配が分かるなんて言うつもりはないので、そういうことにしておく。

四つ目の扉が開いた音がした。

やばい、ホント早くしないと…
これ以上なんか文句あるか！って顔を今までの無表情を崩してすれば、
皇子は少し驚いた顔をして、納得したのかすぐに服を脱ぎにかかっ

た。

…六つ目の扉が開いた。

私は皇子の服を着てさらにマント頭から被る。
さすがにここは不自然だが、髪の色は誤摩化せないので仕方ない。
うまく兇人たちが皇子の金糸の髪は暗い中では格好の的だから云々と勝手に解釈してくれることを願う。

ほんとは下の服も借りたかったけど、そうすると皇子が残念な格好になることは分かってるので最初っから要求はしなかった。いくらイケメン皇子でも下はいてないとか残念すぎるし。
幸い私はメイドのスカートの下にスラックスをはいている。
スカートをがっとまくり上げた。はしたない行動に皇子は目を丸めるが構っちゃいられない。
まくれば見えたスラックスは暗闇なら皇子の下の服に見えなくもない。

うん、よかった。これならなんとかなるな。

私はメイド服に付いているリボンの一つを引き抜いて、まくり上げたスカートを縛った。

「なるべく時間をかけて大広間に向かいます。お手数ですが兵舎に着いたらその旨を兵にお伝えください」
「分かった」
「それでは皇子お気をつけて」

私の言葉に皇子は頷いて窓から身を投げた。私はドアノブを握ってタイミングを計る。
着地の時に大きな音がするだろうから、ちょうど同じ時に大きな音を立ててドアを開けて皇子の立てた音をかき消す。

バタン！
びりっ

殺気が私に集中した。
ディシオとの実践は一応始めてるけど、やっぱり本物の殺気には体が震える。

さっきは皇子に殺気が集中してたからまだ耐えられたけど…
ううん、気張れ私！もしここで殺されたら二度とルド様のお顔を拝見できないんだぞ！

…やっべ、なんか一気に頑張れる気がしてきた！
うおおお！ルド様！私頑張ります！明日の朝もルド様の寝顔を見るために！

一気になりを潜めた恐怖に、私は兇人を誘導すべく、頭の中で城内の地図を展開しながら疾走した。

最強メイドな彼女と第一皇子様２（前書き）

こんな上手く行く分けないだろ！ってツッコミは勘弁してください。
何しろ書いているヤツの頭が弱いもんで…

逃げるだけで暇なので差し迫った問題を考えてみようと思う。
議題は第一皇子にどう言って今回のこと黙るように仕向けよるかだ。
主に私の存在を、だが。

今回の件の全容は、事後処理と犯人の捜査のために皇子は起きたことを事細かに話すだろう。
この国には犯罪に対応する機関がない。
だから皇子が話すのは皇子の元教育係で現補佐をしている大臣にで、その大臣が捜査をするのに使うのは国の軍の人達だ。
ーー軍の、戦う専門の人達が捜査なんてできるんだろうか？とものすごく疑問に思う。
けど他に任せられるところはないから仕方がない状態なんだろう…

そんな素人を使うような状態で甘んじているから、これまでたくさんの兇人を雇って皇子たちを暗殺しようとした首謀者が捕まらないし、暗殺をしようと目論む者も減らないんだ。

…と、論点がずれた。うっかり、つい日頃からの鬱憤が…

つまりなにが言いたいかというと、こういうことにしっかりと対応する機関がないから、
今回の暗殺未遂の事のあらましは、大臣、軍隊トップ、下々の兵へとどんどん広まっていく。

そこまで広まったら、もう城中の人間に広まるのは時間の問題だ。
別に話が広まることはどうってことない。けど今回の私の行動が行動だから、

メイドたちにも話広まる。
←
へー！すごい機転だよね！皇子の服着て囮だなんて！しかも兵が待ってる大広間に上手く兇人を誘導したんだって！
ルド様の側仕えなんだよね！へえ側仕え！美人（側仕えは見目麗しいという固定概念）で優秀ってすごい人なんだ！
←
見に行ってみない？そのメイド！
あ、いいね！見てみたいー！
←
……え？あれが？側仕え？
うっそー！地味！私の方が全然可愛い！
あんなのが側仕えだなんて！許せない！！

…なんて、笑えない。
またあの鬱陶しい嫌がらせの再来になってしまうじゃないか。
なにそれマジ困る。
だって最悪ルド様の兄四人全員のメイド強制エンカウントで強制バトル開始だよ？
対応出来ないって！そんなの！無理だよいくらなんでも！

はあー…
ほんと、皇子を呪いたくなってきたよ。
なんで私が救える範囲で兇人に狙われたりするかなあ…

しかもルド様との癒しのお茶会は邪魔するし、
お仕えの仕事の差し支えになるような原因つくってくれやがるし
くそ！…あの疫病神め！

ああでも、やたらにルド様の私室に訪問する事はなくなるかな…
だって今回の事でルド様がなんで私を側仕えに据えているかって理由は分かるだろうし。

メイド、特に側仕えとなるような者が、主を危機から守るのは当然だ。
だが、命に関わること故に本当にそれを実行出来る者は少ない。
今回の出来事で私が行ったのは命を顧みずに自らを囮として皇子を危機から逃がすこと。
もちろん私は兇人から逃げ切れる確信があったからこその行動だけど、
皇子は私が戦える事を知らないから、私が命をかけたと解釈してくれるだろう。

ルド様は第一皇子と同じくらい兇人に狙われる可能性がある御方だから、
だからこそルド様が、セバスチャンが命をいつでも投げ出す覚悟のある私を側仕えにしたんだと理解してくれるだろう。

そうすれば皇子はルド様が私を雇った理由を分かったことから私に興味をなくし、
ルド様の私室に訪問する機会は今まで通りになるってもんだ。

あ、なんか黙るように仕向けるための言い訳、考えるやる気がめっちゃ出てきた！
うまく仕向けれれば前みたいなルド様とのうふふあははなお茶会ができる！！
待っててくださいルド様！私、必ず上手く皇子を言いくるめてルド様とのお茶会・復活！させてみせます！！

そして私は私の存在を言わないように仕向けるための内容を考える時間を稼ぐため……
っと、違った。
皇子が兵を大広間に配置する時間を稼ぐために城内を走った。

＊＊＊

部屋の窓から身を投げ出す。
軍の訓練に参加したことはあるから、戦うことへの恐怖はそれほど持っていないが、
こうして高い位置から飛び降りることは初めてで、おもわず怯む。
そんな自分を内心で罵倒して飛び降りて今に至るのだが。

ルドのメイドが複数兇人がいると分かっていながら自ら囮になると言ってきたのに、
たかが二階の位置から飛び降りるくらいで怯むなんて情けないこと出来るわけない。

がさがさがさ！
垣根が大きく鳴る音と同時に頭上から大きな音を立ててドアが開い

た音がした。
どうやらあのメイドは本当に冷静らしい。
俺を…そういえばあいつ、俺を平手打ちしやがった…
まあそれは忘れてやろう。偶然とはいえ、あれがなかったら俺の後頭部には今頃刃物が生えてたことだろうから。
兇人が投げた刃物が間近の壁に突き刺さった時にはメイドは驚いて固まっていたのに、
その後は俺をこの部屋に導いて上手く逃がした。
俺が無我夢中で走った先にあった部屋のことを正確に判断し策を練ったし、垣根の音で外に逃げた事を悟られないようにドアを大きく開け放すし、
ルドが、というかセバスチャンがあいつを側仕えに起用したのもまあそういう所を買ってだろう。
見目麗しい者を雇うのは自らの権威を表すためだが、切羽詰まった状況ならこういう時に役立つメイドの方がいいだろう。

「右手だったか」
無我夢中に走っていたから、あの部屋からの兵舎の位置が分からなかった。
だからメイドが落ちてからどちらに向かえばいいのかを示したことは有り難かった。
「確かに、優秀だな」
急ぎ向かいながら小さく呟いた。

＊＊＊

もう大丈夫だろう。
かなりの時間逃げたから、そろそろ大広間に兵も配置し終わっているだろう。

…大広間にいけばすぐにこの兇人たちも取り押さえられるだろう。
情けないことに私を追いかけてくる兇人たちは疲れたのか、息を切らせている。
まあ、三十分も全速力で走ってれば普通の人は息は切れ切れだろうけど、
アンタたち仮にも暗殺者でしょー？このくらいで息を切らしてどうするんだ…

まあ、嬉しい誤算だからいいけど。
もし疲れて思考力が低下していなければ、冷静になって私の身長が低いことや、
叫んで助けを求めることもしないことに疑問に思ってただろうから。

というか、ホント能力低いな。
気配を漏らすわ、追いかけてくるだけで挟み撃ちしようとしないし、
入れ替わって囮になってることにも気付かないし、
走ってる音が皇子よりも軽いってこととか、気付かないのかなぁ…

まあ、兇人のイメージが日本の忍者っぽく私の中にインプットしてしまってるのが原因かもだけど。
兇人は暗殺者、さらにセバスチャンさんによると独特の黒い衣装で闇に紛れ、小さな刃物を投げて相手を一発で仕留めるらしい。

うん、聞けばまんま忍者じゃね？まあ実際は私の思い描いてる忍者像より全然能力低いんだけどね。

もうすぐ大広間だ。
皇子に私のことを上手く誤魔化して語ってもらうにしても、配置された兵に顔を見られたら元もこもない。

よし、頑張るんだルリ！これが終わったらルド様の寝顔を拝見してから寝床に向かおう。
…あ、フィエさん心配してるかな。戻ってくるはずの私戻ってこないし…。

まあ、それはとりあえずこの騒ぎが終結してから考えるか。

後ろにたなびかせていた皇子のマントをたぐり寄せる。
そして目以外の場所をマントで覆い隠しながら皇子から借りた上着を脱ぎ、リボンで結んで固定していたスカートも元に戻す。
あれだけ疲労している兇人たちならもう、細かい所なんて気にする余裕もないだろう。

あらかじめ少しずつ落としていた速度をさらに落とし、兇人たちが追いつくタイミングを見計らい、

バンッ！！
私は大広間に続く、扉を思いっきり開け放った。

待機していた兵が一斉に詰めよる。
兇人たちも私に追いつく丁度その時だったから、兵たちの群れに突っ込むことになった。

混戦になってしまったが、まあ疲労している兇人に戸惑うような兵は連れてきていないだろう。
第一皇子直々の招集だし。

切り掛かってくる兵を避ける。
私の姿は皇子の黒いマントを巻き付けていたから狙い通りメイドとしてではなく他と同じ兇人と判断されたようだ。
これでいい。兵たちには私の顔はわれないで済んだ。

後はこの状況に対応しきれていない兇人の間を縫い、
開け放った扉まで戻ってそのまま走り去り、
ひっそりと何事もなかったように皇子の所に行って話をすればいいだろう。
扉を開け放った時に皇子の姿は見つけたから。

…上手く、出来れば抜け出したことを気付かれずにすることが最善。
だが、

「ーーおま、」

聞き覚えのある声だと思って周りを気にしながらそちらに視線を向ければ、

見知ったヤツが。…というかディシオだ。
まあ、第一皇子直々の招集だから副隊長殿が出てきても可笑しくはないだろう。

というか周りに気を取られてたからって、ディシオの存在に気付かなかっただなんて！

すぐに気付いてたらもっと簡単にこの場から誰にも気付かれずに身を翻せたのに。

ディシオが私に肉薄した。
もちろん、振り、だけど。

「で、なにやってんだ？」

顔を近づけて小さな声で言ったディシオに私は目線を開けっ放しの扉に向けることで答える。
ディシオはそれで理解してくれたらしくそのまま私を扉の向こうへ吹っ飛ばしてくれた。

って、ちょちょちょ！力入れ過ぎだって！

扉を通り越してそのまま壁に激突しそうな勢いで吹っ飛ばされる。
壁に激突したらその音で他の奴らにばれる！
慌てて勢いを殺し気付かれずに身を隠した。

「……はあ、疲れた」

喧騒から遠退き、被っていた皇子のマントを脱いで、上着と一緒に小脇に抱える。
もっとゆっくりと歩いてたい気分だが、のろのろして皇子に変な行動されると困る。

皇子からしたら、一番最初に出てくると思っていた私がいなかったんだから。
兵に探すように言われても困る。

行きますか…ふう。

歩いていた足を上げて、私は皇子のいる場所に走って向かった。

こつりとわざと足音を立てれば、皇子は慌てて構えて振り返った。

「！どこにいってーー」

声を荒らげようとした皇子に、借りた変装一式を押し付けて黙らせる。

無表情でそれを行った私に皇子はむっとした表情をしながらも一式は受け取り静かに視線をよこす。

…運のいいことに、皇子の側に兵は一人もいなかった。

おいおいいいのかそれで！確かに兇人はあれだけだけど、まだ他に仲間がいたらどうするんだ。

私が兇人だったら皇子既に殺されてるよ！いくら皇子自身も戦えるからっていって護衛無しとか…！

ああもう、取り締まり機関もなければ護衛の基本もなってない…。

今度、ディシオとの訓練やめて護衛とは何たるかを教え込んでやろうか…

まあ愚痴はこの辺にしておかないと、機嫌悪い皇子の視線を受けながら、

私のことを上手く誤魔化してくれるように『お願い』した。

「皇子、今回のことは見ず知らずのメイドがやったと仰っていただけないでしょうか」

「…なんでだ？褒美くらいは出るのに？」

眉間にしわを寄せる皇子に私は無表情のまま答える。

「皇子の話に私が出てこれば、必然的に私も話をすることになります。
…そうすると私はあの時、ルド様の部屋にいたことがばれてしまいます」
「…ああ、そういえばお前夜伽の帰りだったな」

だからそんなやらしいことしてないって言ってるでしょー！！
どうしてその認識改めないかな！
今回のことで私を上手く普通に優秀な役立つメイドだって認識したはずでしょ！！
あああ、くそ！むかつく　殴りたい！
今回の厄介ごとの発端のくせに！

「…決してルド様にそようなことは行っておりません。
ただ、何もしていないことが事実だとしても周りはそうは見てくれません、
…ルド様のお立場が悪くなるような虚実が飛び交うようなことだけは避けたいんです」

うっうっうっ
こんなことでルド様のお名前を出してしまう私が不甲斐ない。
でも揺するようなマネしたら折角勝ち取った普通の優秀なメイドの地位が揺らぐし、
上手く言いくるめた時も後に何か気付かれてしまったらその時がやばいし…

うううう、はぁ…
セバスチャンさんに習い直そうかな…。
え？なにをって？

そりゃ、パーティーで笑顔を振りまきながら気付かれないうちに相手を陥れる話術をだよ。

流石に三週間のメイド研修で身に付くもんじゃないから、側仕えになっても練習しようね、て話に当初はなってたんだけど、側仕えになってすぐに、メイドたちの嫌がらせが始まって、嫉妬を買ってしまうから

パーティーどころか表にも出れないねって話になって話術のセバスチャンさん直々の訓練はなくなってしまってたのだ。

これから使うような出来事があるのかっていったらないだろうし、というかないことを願うけど、いざという時にあった方がいいだろう。うん。

大は小を兼ねるって言うし。習えるもんは習っとけって。

「…まあ、ルドに変な噂がつくのは忍びないしな…。お前のことは適当に誤魔化しておいてやる」

「ありーー…」

了承の言葉をもらって、さっきまでの無表情のままお礼をしようと思ったが、流石にそれは失礼だろうと思って言葉を途切らせた。

日本でのお辞儀がこちらでも通用すればそうしていたが、生憎こちらにお辞儀は高位の相手に平伏す意味しか持っていないから伝わらないだろう。

だから、ちゃんとお礼の気持ちを込めるために作っていた無表情を止め、改めて礼の言葉を言った。

「ありがとうございます」

「……」

って、無反応？
えええ、しかもなんかもの凄く驚いた顔してるんですけどこの皇子。
そんなに私ののっと無表情に驚いたか。そうかそうか、こっちは真面目にお礼言っただけなのにっ！

「……」
「……」

ああ…そろそろフリーズといてもいい頃だと思いません？
いい加減長すぎだばかやろー！

「…ああ、」

え？もしかして今のさっきのお礼の返事だったりするの？
いやいやいや！もう間が空き過ぎて何の返事か全く把握出来なかったから！
おもわずわざわざさっきのお礼の返事だって説明しちゃったじゃないか！

「…では、私はこれで失礼致します」

これ以上皇子と一緒にいるとなんか疲れる。
はやく癒されたいよ。マイエンジェルルド様に会いたいー！
というわけでさようなら！出来ればもう会いたくないです！
寝ているルド様の寝顔を思い浮かべて、ちょっとテンションが上がったまま踵を返して返ろうと、

「そういえばお前、今日はよく喋ったな。ルドの部屋を訪れた時はーー極力何も話さなかったのにな

……ルドのため、か」

呟かれた言葉はただのひとり言なのか、なんなのか、
いまいち理解出来なかったので、もう一度失礼しますと言ってその
場を去った。

最強メイドな彼女と第一皇子様２（後書き）

少し休憩です！次は１５日からまた投稿してきます！
それまでぐっばい＾＾ｑ

閑話

メイドを見送ってから自分も部屋に戻ってみれば待っていたのは、補佐をしているドルドネと側仕えのマルティアだった。
マティは部屋に入った俺にすぐにブランケットを渡して、このまま寝室に向かえるかと思ったが、どうやらマティは俺の味方をしないらしい。
マティに促されてソファに座れば、ドルも俺の向かいのソファに腰を下ろした。
…側仕えのマティは俺の後ろに立って控えているが。

「さてさて、随分大変だったようですの、セシル様」
「ああ、まあな…しばらくは一人での外出は控えるからそんなに睨むな」
「ほほ、なにを言いますか。この笑顔のどこが睨んでいるなど」

そっちこそなにをぬけぬけと言っているんだ。
幼少からお前を知ってるが、その笑顔はお前が説教か脅す時に使う笑顔だろうが。

「それで、なにがあったのですか？お疲れとは思いますが、詳しくお聞かせ願いたいのですが」
「分かっている」

ソファに体を沈めながら俺は目を閉じて息をつく。
頭の中で整理してからでないとこいつにはすぐに見破られてしまうだろう。
面倒だが、腹の探り合いの練習だと思えばまあ少しは気合いが入る。

しなくてはいけないのは、ルドの側仕えであるメイドを見知らぬメイドとすり替えること。

「…と、いうわけだ」

話し終わり、ドルを見れば読めない表情でじっとこちらを見ていた。メイドの無表情も気に喰わないが、ドルのこの表情も居心地が悪くて不愉快になる。

「見知らぬメイド…と申されましたが、何故嘘をつかれるのですか？」

「…なんのことだ？」

「あなた様が見知らぬメイドの提案を聞き入れるとは思いませぬ。しかも相手の顔は暗がりで殆ど確認出来なかっただなど、いくら夜分に一人で出歩くあなた様とてそれくらいの警戒心はお持ちでしょう」

見破られているか、やはり　完璧に。

こいつにはまだ勝てないだろうと分かってはいたが、やはり悔しいものは悔しい。

ばれてしまったなら話さなくてはならない、か。

…ドルなら口を滑らせたりしないだろう。マティもまあ、そうだろうが

「マティ、悪いが席を外してくれ」

「はい、畏まりました」

言えばマティはすぐに部屋を出ていった。

マティを視線で見送ってドルに視線を戻せば、ドルは少し目を見開いていた。
なにをそこまで驚くのか、
…俺がよっぽど重要な話でない限りマティを退けないからだろうか、

…まて、重要な話でないとマティを退けないのに、なんで俺はこの話でマティを退けたんだ？
メイドの頼みが、そこまで重要だなんて思ってはいない、はずなのだが…

「セシル様？」
「いや、なんでもない。それよりそうだな話すか。行動を共にしたのはルドの側仕えのメイドだ。
遭遇した状況が状況だったから黙るように頼まれた」
「ほう、なるほどルド様の側仕え殿が……しかし、ルド様の側仕えは未だセバスチャン殿だと聞き及んでましたが…」
「ああ、よく知らんが表向きの仕事はセバスチャンだが、他の殆どはあのメイドがやっているようだぞ」
「それはまた、何故でしょうなぁ……セシル様、そのメイドの名前はなんと申すか知っておいででしょうか？」
「あ？ーーー確か、ルドはルリと、」

「そうですか、ルリ殿、ふむ」

ドルは考え込むように白いあご髭を撫で付けた。

「…ああ、もうお休みになられても構いませんよ。捜査は発展し次第報告致します」
「そうか、頼む。…それから、明日の朝食は部屋で取る。時間もず

らしてくれないか」
流石にこの時間まで起きていて明日いつも通りというのは辛い。というか無理だ寝たい。

「分かりました。では朝食はこちらに運ぶように手配しておきます。もちろん通常通りの時間に」
「なっ、おいドル！俺の言葉を聞いていなかったか！」
「自業自得でしょう。これに懲りたら本当にもう軽率な行動は避けてくださいね」
「……分かった」

ああ、もう絶対無闇に一人で出歩いたりなんかするかっくそ、眠い…
なるべく早く寝て少しでも疲れを取ろう…
ドルの『お仕置き』がこんなことで終わるわけがないからな…
絶対明日の書類仕事、いつもの倍になってるに違いない。それか軍の訓練に強制参加させられるか、

「ああセシル様、あなた様からルド様、もしくはセバスチャン殿に正式な面会を取り付けておいて頂けませんか？もちろん面会の際にはその側仕え殿のご同伴で、と」
そう言ったドルの表情は、近年まれに見ぬ不愉快さだった。

最強メイドな彼女、説教を受ける（前書き）

遅くなりました！そして累計ＰＶ４万超！お気に入り登録１６０人超！ありがとうございます！

騒動の収まりつつある大広間から誰にも姿を見られないように注意しながら廊下を歩く。

もうフィエさん寝てるかな…

本当はルド様の私室に直行したかったけど、フィエさんがもし心配して寝ずに待ってたら申し訳ないから、ルド様の寝顔は明日の朝に取っておこうと思う。

そんなことを考えながら、メイドに与えられてる控えの部屋に向かい……

「……」

やっべーー！！！

うあああああ、ど、ど、どうすればいいのっこの状況！

さっきの口止めの方が生温かったって思えるほど今の状況に困惑してるの自分でもすごく分かる。

ああ、やばい、めっちゃ怒ってるよこの笑顔！

どうするどうする！まじで！

「ルリ？」
「はいいい！なんでしょうか！」
うん、もう分かってるとは思うけど、
…私の部屋の入り口の横にセバスチャンさんが壁に背中を預けて腕組みしながら待っていたのだ。
「ルリ、遅かったね心配したよ？メイドの子に戻ってこないと報告を受けてルド様の部屋を覗いてもいないし、
こんな時間まで、な　に　を
していたのかな？」

こええええ！！！

セバスチャンさんの口調がなんか可笑しい。
いつもは砕けた口調でもどこか物腰柔らかな感じがするっていうか、敬語じゃないのに敬語に聞こえるような丁寧な雰囲気放ってるのに！
今日の口調は物凄く荒々しく聞こえる！

しかも最後のとこなんて無駄に言葉を区切ってて、
表情はにっこりと擬音語が付きそうなくらい笑顔なのになんか怖い。
これがいわゆる笑顔なのに目が笑ってないってことですか。
そしてあれですか、本気で怒ってますよってフラグですか。
「ご、ごごごめんなさい！えっとですね！ルド様の部屋を出た所で第一皇子に見つかって、いろいろ問いつめられてた所に運悪く兄

人が襲撃してきましてですね、それで逃げていろいろあって終結したから戻ってきたっていう」

「……」

「い、一応マズいことは何もなかったですよ！口止めも抜かりないですし！あ、ほら、もし万が一ルド様が狙われた時の予行練習にもなりました！うん！」

「……」

うあああああ、沈黙が痛い。視線も痛い。

普段怒らさなそうな人が怒るとやっぱ恐いんですね、そうですね。

フィエさんから旧メイド解雇事件の時のあの後のセバスチャンさんがどんなだったかは一応聞き及んでたけど、

恐いよまじで。

鬱陶しかっただけの旧メイド達だったけど、今は同情するよ！

恐かったでしょ！セバスチャンさんの説教！

「……ルリ？」

「も、申し訳ありませんでしたー！！！！！」

セバスチャンさんの重圧に耐えきれなくて土下座する勢いで頭を下げて謝った。

……あ、しまった！

焦り過ぎて、こっちでは謝罪の意味はないのに頭を下げてしまった。
セバスチャンさんは私にとってのお辞儀の意味を知っているから不思議がる事はないけど、

でも、焦っていたからって最上級の作法を求められる側仕えである私が、間違った作法を使ってしまうなんて！
ああもうどうしよう！第一皇子に見つかるという失態をしてしまってセバスチャンさんを怒らせてしまった上に、
謝らなきゃいけないこの状況で間違った作法を使うなんて、

これはもうルド様の側仕えの任から降ろされてしまうかもしれない。

うう、ルド様のお側にいられないなんて、これからどうやって生きてけばいいんだ！

最悪な状況が頭の中にぽんぽん浮かび上がってもう今にも泣いちゃいそうな気持ちになり

「心配したんだよ、ルリ」

「！」

びっくりして下げっぱなしだった頭をばっと上げてセバスチャンさんを見た。

「本当に、心配していた事をまず理解しなさい」

セバスチャンさんは組んでいた腕を解いて、背をあずけていた壁か

ら離れて言った。

セバスチャンさんの表情は優しい。

昔、迷子になって泣き叫びながら迷子センターで迎えを待っていた私を引き取りにきてくれた時のお父さんの表情にそっくりだった。

もちろん、うちの親の顔がこんな美形で、安心すると同時に落ちちゃいそうになる危険性なんて全くなかったけど。

「…はい、心配かけてごめんなさい」

謝ったのに、顔は緩んでしまった。

私はてっきり第一皇子に見つかってしまった事を咎められたと思っていたから、

心配されてた。

そりゃ、一応セバスチャンさんは私の養父だし、今までも色々と手助けしてくれたりした。

でもメイド一掃の件はどっちかというと膿を出す意味の方が強いように感じたし、セバスチャンさんはルド様至上主義だ（私も人のこと言えないけど）。

だから、こんなふうに、咎められる前に心配の言葉をもらえるとは思ってもみなかった。

……嬉しい。

セバスチャンさんはこの世界でのお義父さん…お父さんなんだ、って初めて心から感じられた気がした。

＊＊＊

ルリと仲のいいメイドの子が部屋を尋ねて来た。
何かと思えばルリが帰ってこないらしい。
ルド様の寝顔に見惚れて帰ってくるのを忘れてしまっているか、ルド様がまだ起きていらして帰って来れないのか、どちらかだろうとことを楽観視しつつ、念のために確認する為にルド様の私室に向かった。

ルド様の私室に向かう途中、やけに下ーー庭の方が騒がしい気がした。

なんだろう？賊でも入ったのだろうか、自分の思考がそこまで辿り着いた所ではっとして急いでルド様の私室に向かった。
決して遅くはないはずの自分の足が遅く感じる。それがもどかしくて、誰もいないことをいいことに小さく舌打ちをした。

「…！」

ルド様の部屋の前に辿り着けば、暗くて確認しづらいが、壁に何かが突き刺さっていた跡があった。
ざっと血の気が引く。

ばたんっ

この扉の先にもし、ルド様の、ルリの血まみれの姿が転がっていたらどうすればいいのか、

嫌な予想を頭に浮かべながら扉を開けた向こうを確認すれば、
血の臭いも何もしない、いつも通りのルド様のお部屋だった。

「っん、ルリ…？」

眠りの浅いルド様が、大きな音を立てた扉に気付いて目を覚まされた。
もう完全に眠っている時間なのに、起こしてしまったことを申し訳なく思う。
けれど、確認しなければ、

「ルド様、夜分遅くに申し訳ありません、しかし、少々伺いたいことがあるのですが、よろしいでしょうか」
「……なにかあったの？」

私の問いかけにすぐに意識をしっかりさせるルド様にいつもながら感銘を受けつつ、お聞きする内容を頭の中で整理する。
まだ何が起こったか分からない状況でルド様に心配をおかけするわけにはいかない。

「実はルリに用事があったのですが、部屋を訪れても見当たらず
もしかしたらまだルド様のところにいるのではないかと思いまして
…」
「…いや、ルリはもう随分前に僕の部屋を出たはずだよ」
得られなかった情報に表情に出しそうになるのを必死に押さえて礼を申し上げる。
…ああいけない。

聡明なルド様が私の言葉から何かを察しそうになったので慌てて言葉を繋いだ。

「厨房などにも一度向かいましたが、入れ違いになったのかもしれません。もう一度そちらを探してみることに致します。」

「…そう、ルリが見つかったらまた知らせてくれないかな。気になって、眠れそうにない」

「……はい、畏まりました」

誤魔化されてくれないルド様に私は苦笑を交えながら頷いた。

ルド様に申した通りに厨房に…は向かわずに兵舎のある庭園奥に向かう。

先程聞こえた音は人の話す雑音と金属のぶつかる音だった。あれは武装した兵達が移動する時の音だ。

どこで兵達がなにをしているのかは分からないが、兵舎に向かえば何かしら分かるだろう。

そしてそこで知れたのは第一皇子の命で大広間に待機していることと、メイドが兇人の囮になっていてその兇人を大広間に誘導していること。

メイドとしか知れなかったが、なぜかすぐにルリの顔が浮かんで、それが正しいように感じられた。

大丈夫だろうか、囮になるなんて、なんでそんな危険なことを、ルリのことをルド様は気に入っていらっしゃるから、ルリが傷つけばルド様が悲しまれることはすぐ分かるだろうに、

ああ、そうか。第一皇子が危険にあってもルド様は悲しまれるからか。

…まったく、仕方がない子だね…

ここにいても私にできることは何もないだろう。
心配に思いながらもルリが帰ってくることをルリの部屋の前で待つことにした。

ひっそりと足音を立てずにやってくるルリに目を細める。見事に音を殺している。ぱっと見る限り怪我も見当たらないどころか服が着崩れている様子も汚れている様子も見当たらない。まさか先程まで囮となって兇人から逃げていただなんて思いもしない出で立ちだった。

顔を上げたルリが私の存在に気付く。

「ルリ？」
「はいいい！なんでしょうか！」

まあ、いいだろう。とりあえずは心配かけたのを叱らなくては。
肉食獣に追いつめられた小動物の用にカタカタ震えるルリを見下ろしながらばれないように安堵の溜め息をついた。

…無事で、よかった。

最強メイドな彼女、説教を受ける（後書き）

後半に続きます。といってもお分かりの通りストック切れて更新が亀になっている状態なので次更新はまだ先です。一ヶ月に3話くらいは最低上げたいと思っているので温かい目で見守ってください。

でわ！

最強メイドな彼女も落ち込む（前書き）

お気に入り２００件超！ありがとうございます！

最強メイドな彼女も落ち込む

こんにちわ、ルド様の側仕えメイドことルリです。
只今早朝、いつも鍛錬をする庭先に座り込んでおります。

……はあああ、

「はあ…」

真夜中まで起きていて本当はもの凄く眠いんですが、あのあとセバスチャンさんにより衝撃的なことを言い渡されて、とても眠る気にはなれずにベッドから逃げ出してきた次第であります。
もともとほんの少し覚悟してたことだったけど、セバスチャンさんが心配していてくれた事実にすっかり構えを解いてしまい、無防備だった心に思いっきりぐさりとクリティカルヒットをかまされたわけだ。

もしこれが計画的に行われたことだったら少し人間不信になりそうです。
セバスチャンさん、持ち上げて落とすですね……。
結構な御手前でした…。

で、なにを言い渡されたかというと、
……思い出しても涙が溢れそうなんですけど、

ルド様の側仕えの任を解かれちゃいました。

うわあああああああん！！

なんてこったーー！！

……ぐす、いや、でも一応二週間限定でですけどね…。流石に永遠とかだったら私自害するしかないっていうか、いやでも命を粗末にするのは頂けないのでメイドから忍者にジョブチェンジして影ながらルド様襲う兇人始末してこうとか一応考えてた…。

それにしても二週間はきついよ。
ただ任を解かれたんじゃなくて二週間の間はルド様のお顔を拝見することも絶対駄目だって言われたし。確かに私に反省させようとするなら一番有効な手段だろうけど…。この二週間、ルド様の心のアルバムだけで生きてくとか、辛過ぎる。あああ、ううう。

（第一皇子のバッカヤローーーー！！面倒後と持ち込みやがってーー！！疫病神がーーー！！）

声に出したら不敬罪でしょっぴかれてしまうので、声を出さずに口パクで叫んだ。

「なにやってんだ？」
「うおう…！」

いきなり声をかけられて驚いて思いっきり体が揺れた。
振り返らなくても分かるけど、それでも半ばノリでばっと振り返ればそこには数時間前に見た格好のままのディシオがいた。

「めっずらしいな、ここまで近付いたのにお前が気付かないなんて。足音立ててたぞ？」
「いや、うん。そうだね」

精神の疲弊がちょっと大きくて、いつもみたいに周りを気にする気分にならなかったんだよ。

……ああ、ルド様…うう、一瞬忘れてた悲しみがぶり返して余計悲しくなった。

ディシオを見上げた顔を下げて、膝を抱えて『ザ・落ち込んでます』の格好をする。

隣にどさりとディシオが座り込む音が聞こえてちらりと視線を寄越し、すぐに元に戻した。

べ、別に慰めて思おうなんて思ってないよ…！

ただ、あの残念な護衛の仕方とか調査の仕方とかの改善策教えてやんなきゃな…てのを思い出したんだよ。うん。

私の勝手な中世っぽい異世界のイメージとしては、皇子の部屋の前には兵が控えていることが当たり前だと思ってたんだけどな…って思ってたんだよ！

一応夜中の城内の巡回はやってるらしいけど、常に兵が立って守ってるのが城に入る正面口と他いくらか存在する勝手口だけってどういうことだ。人手不足なの？いや、城内より城壁の方に警備の重点を置いてるのは知ってるけど…とか考えてたんだよ！

慰めてもらおうとか全く思ってなかったからね！

「なあ、お前なんで兇人に混じってたんだ？」

「…察すれば、大体分かると思うんだけど」

皇子からメイドが囮になって云々は聞いてるだろうに。

ディシオが振ってきた話題に私は恨めしそうな声で答えた。

その話題、私の傷口めっちゃえぐってるんだよ。セバスチャンさんのあの笑顔を思い出す…あートラウマになりそう…

できればそっちじゃなくてどうして落ち込んでるのかを聞いて欲かっ……、いやいやいや。違うってそうじゃなくてね！こういう時は何も聞かずに黙って傍にいてくれて、さりげなく頭をポンポンと優しく叩くくらいの対応がベストっていうか……。って、アーッ！もう！

…よし分かった、よく分かったよ私。そうか、落ち込んでるんだね。そりゃルド様とニ週間も会えないんだもんね！落ち込んで当たり前だよね！

分かった。理解したからそろそろ落ち着こうか、冷静になろうか私！いちいちディシオに慰めてもらうビジョンを頭ん中で想像すんなマジで！

想像する内容が少女漫画のガチガチな青春っぽくて恥ずかしいわ！

「あーまあ第一皇子様が言ってたメイドがお前でってことは理解してるぞ」

「…あんたに私が武術ができること黙っててって言った理由と同じだよ。囮になったのが私だって気付かれたくなかった。けど兇人達を大広間に誘導したかった。…考えた結果があれってこと」

「へえ」

傷抉られるのに嫌々ながらもちゃんと教えてあげたのに、ディシオからはどうでもよさそうな返事。

…こいつ、喧嘩売ってんのか…イラっときた。

若干第一皇子に対しての不満からの八つ当りのような気がするけど

（あと寝不足も相まってるのかもだけど…）殴りたい。
…あ、でも一応大広間でこいつが私を吹っ飛ばしてくれたから楽に退けたんだから、殴るのは流石に申し訳ない気もする…

……あ。

「…ふふふ、そうか。恩は返さないとね」
「…！」

不気味に笑った私にディシオはびくっと肩を揺らして身を私から離した。失礼なヤツだな。
ただ上手いこと八つ当りと恩返しを一気にできる方法を見つけただけなのに。

「というわけでディシオ、あんたに私がみっちり、しっかり、ばっきり護衛と警備の仕方を教えてあげようじゃないか！」
「いや、どういうわけでだよ！」
「いいから聞け」
「……はい」

＊＊＊

ようやく終わったルリの講義にほっとしながら俺の方に寄りかかって眠っているルリを見遣る。

どうやらかなり疲れていたらしく、話が要人の部屋の前での警護から、侵入されやすい経路の説明とそれに対応した巡回の仕方についての話になったところでルリの口調がゆったりになって、数分もしないうちに船をこぎ出してそのまま寝てしまった。

こういう時じゃないとまじまじと顔を見れないのでここぞとばかりにルリを観察してみる。
だってそうだろ？普段は鍛錬でひたすらやり合ってるから顔なんて見る余裕なんてない。
そんな隙見せたら打ち込まれまくって全身痣だらけになるだけだ。

…と、観察観察。

まず、華奢だ（というか貧相？）。メイドとしては普通だろうが、こんな腕で地面を抉るような斬撃を放っていると思うと本当に信じられねえ。
それに俺が扉の外側に吹っ飛ばした時の勢いを殺す身のこなしなんて、惚れ惚れするほどだ。
こいつが女で、第五皇子の側仕えじゃなかったら、すぐにでも引き抜いて副隊長補佐にするのに。
惜しいよなあ……

次は顔っと、……うお？日頃から普通の顔立ちだと思ってたが…意外と睫毛が長い。
髪や目が黒い奴は珍しい。俺も黒色を見るのはルリで十数人目だし、こうやって間近では初めてだ。
金や茶と違う黒の質感に思わず手を伸ばしそうになって、我に返った。

流石に触ったら目覚ますだろ。それで目を覚ました後の仕打ちが恐い。
…容赦ねえからな、こいつ。

いっそ武をもって守るほうが確実でしょう？と語った面白い奴。
メイドの身で武を習得するわ、護衛や警備の知識はすごいわ、ほんと男じゃねえのが惜しい。
こいつが補佐についてくれたら俺は後ろを全く気にすることなくあの役立たずの隊長殿を引きずり降ろすことができるってのに…

…まあ、望むだけ無駄か。

ルリが男になるのがありえねえし、もしなったとしてもルリが第五皇子から離れてわざわざ俺に付くとは思えねえ。
まあ、今度相談くらいならするか。博識そうだし、なんかいい案出してくれるかもしれねえし…

最初の観察からだいぶ脱線し終わって、もう一度俺の肩に寄りかかっているルリを見下ろした。

……つうか、どうするかな、これ…。
昼から仕事だから朝のこの時間のうちに少しでも睡眠を取っておきたかったのに、こいつ起きる気配ねえし、この調子じゃ宿舎に戻れねえ。

…ここで一緒に睡眠とっておくか？いやいや…

あー…マジどうすっかな…
…まあ、落ち込んでるみたいだったこいつが普段通りになったみたいだから、いいか。今日一日くらいの寝不足なんて。

そんなことを思って　ふう、と息を吐いてだんだん明るくなってきている空を見上げた。

最強メイドな彼女も落ち込む（後書き）

ディシオの黒い色素の人と遭遇した人数を数人目から十数人目に変更。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9787m/

最強メイドな彼女の最強伝説

2010年12月26日03時53分発行